JICA海外協力隊向け実践ガイド

クロスロード

CROSSROADS

9

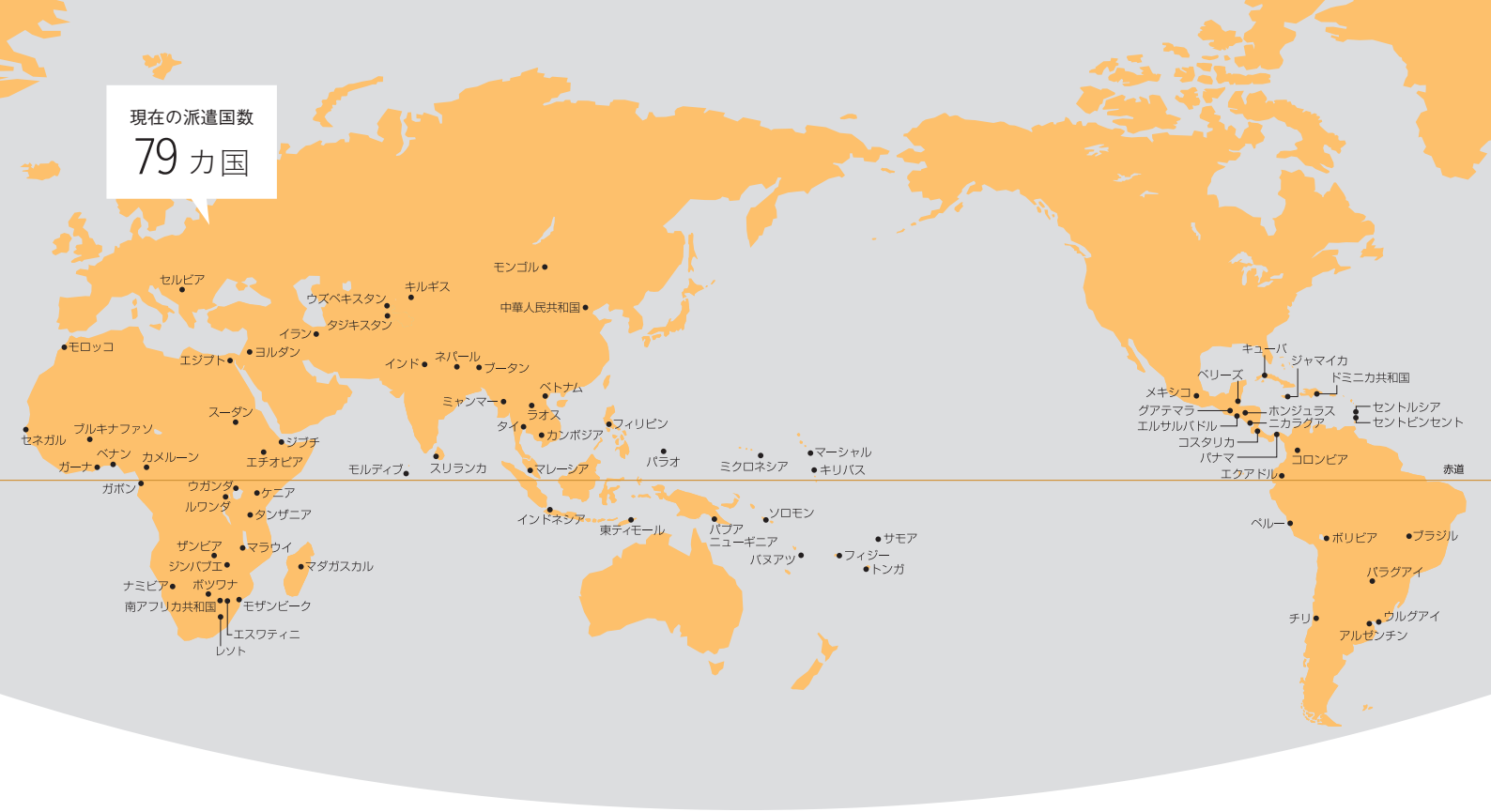
2019 SEPTEMBER

特集 1

ものづくり分野の活動ポイント

特集 2

“美徳”を伝える活動



JICA海外協力隊 派遣現況

（2019年7月末現在）

■ アフリカ地域

国名	JV	SV
ウガンダ	40	2
エスワティニ	4	1
エチオピア	25	
ガーナ	54	2
ガボン	21	7
カメルーン	24	2
ケニア	52	6
ザンビア	70	11
ジブチ	12	
ジンバブエ	6	
スーダン	4	
セネガル	37	2
タンザニア	57	3
ナミビア	13	
ブルキナファソ	3	
ベナン	45	
ボツワナ	15	
マダガスカル	39	1
マラウイ	44	
南アフリカ共和国	9	4
モザンビーク	36	3
ルワンダ	48	
レソト	1	1

■ アジア地域

国名	JV	SV
インド	18	
インドネシア	11	1
ウズベキスタン	26	7
カンボジア	21	10
キルギス	31	
スリランカ	10	
タイ	32	5
タジキスタン		2
中華人民共和国	7	
ネパール	55	4
東ティモール	36	
フィリピン	25	2
ブータン	16	5
ベトナム	39	16
マレーシア	18	7
ミャンマー	9	4
モルディブ	16	
モンゴル	49	
ラオス	40	1

■ 大洋州地域

国名	JV	SV
キリバス	8	
サモア	16	1
ソロモン	34	5
トンガ	19	2
バヌアツ	21	4
パプアニューギニア	35	5
パラオ	8	5
フィジー	27	4
マーシャル	6	1
ミクロネシア	14	8

■ 欧州地域

国名	JV	SV
セルビア	4	2

■ 中東地域

国名	JV	SV
イラン		1
エジプト	14	2
モロッコ	22	6
ヨルダン	38	

■ 中南米地域

国名	JV	SV	日系JV	日系SV
アルゼンチン		18	3	6
ウルグアイ		6		
エクアドル	48	6		
エルサルバドル	10			
キューバ		1		
グアテマラ	23	2		
コスタリカ	24	10		
コロンビア	21	13		
ジャマイカ	22	11		
セントビンセント	3			
セントルシア	18			
チリ	5	5		
ドミニカ共和国	28	7	3	1
ニカラグア		1		
パナマ	18	1		
パラグアイ	38	2	7	2
ブラジル			71	19
ベリーズ	16			
ペルー	48	5		
ボリビア	39	1	3	1
ホンジュラス	29			
メキシコ	2	9		

■ 合計

	JV	SV	日系JV	日系SV	小計
派遣中 （男性／女性）	1,776 （768／1,008）	253 （179／74）	87 （32／55）	29 （11／18）	2,145 （990／1,155）
累計 （男性／女性）	45,206 （24,030／21,176）	6,505 （5,260／1,245）	1,501 （574／927）	544 （252／292）	53,756 （30,116／23,640）

JV ＝ 青年海外協力隊
SV ＝ シニア海外ボランティア
日系JV ＝ 日系社会青年ボランティア
日系SV ＝ 日系社会シニア・ボランティア（単位：人）

クロスロード

2019 SEP

Contents

4 JICA Volunteers' NEWS
▶他県の看護師隊員と協力し、二次救命処置の勉強会を開催（ラオス）
▶ブラジルにおける日本の国際協力60周年を記念した野球教室と国際親善試合を実施（ブラジル）

特集1
ものづくり分野の活動ポイント

6 CASE 1　機械分野の技術指導
信末健一さん（ガーナ・電気・電子設備・2016年度4次隊）

8 CASE 2　アパレル分野の技術指導
中村真奈さん（スリランカ・服飾・2016年度2次隊）

10 CASE 3　メーカー工場での技術指導
武藤 正さん（SV／ベトナム・品質管理・生産性向上・2016年度4次隊）

12 活動Q&A集

特集2
"美徳"を伝える活動

14 CASE 1　遅刻・無断欠席
安達夏美さん（モンゴル・テニス・2016年度3次隊）

16 CASE 2　職場の美化
村島正江さん（ソロモン・看護師・2016年度4次隊）

18 CASE 3　地域の美化
徳竹野原さん（マラウイ・コミュニティ開発・2016年度3次隊）

20 CASE 4　授業規律
松井 峻さん（ラオス・小学校教育・2017年度1次隊）

22 "失敗"から学ぶ
天野早智さん（ホンジュラス・助産師・2016年度4次隊）

24 希少職種図鑑
▶都市計画　谷津憲司さん（SV／コロンビア・2015年度3次隊）
▶土壌肥料　原田浩司さん（ネパール・2016年度1次隊）

26 JICA Volunteer's Before ▸ After ～人生を変えた2年間～
ハラル食品販売店 経営者　松本圭太さん（インドネシア・陸上競技・2013年度1次隊）

28 OB・OG匿名座談会
ものづくり分野篇

30 JICA海外協力隊的プチテクガイド
自分で髪の毛を切ってみよう／筋トレで健康に！／あるものでクッキング

32 INFORMATION

34 JICA海外協力隊のつぶやき
お題：「おまじない」

35 JICA進路相談カウンセラー／青年海外協力隊相談役の紹介

■職種別索引

	掲載ページ
コミュニティ開発	18
都市計画	24
土壌肥料	25
電気・電子設備	6
木工	28
品質管理・生産性向上	10
陸上競技	26
テニス	14
野球	4
小学校教育	20
幼児教育	36
デザイン	28
手工芸	28
服飾	1、8
看護師	4、16
助産師	22

■国別索引

	掲載ページ
インドネシア	26
エチオピア	1
ガーナ	6
コロンビア	24
スリランカ	8
ソロモン	16
ネパール	25
ブラジル	4
ベトナム	10
ホンジュラス	22
マラウイ	18
モンゴル	14、36
ラオス	4、20

■出身都道府県別索引

	掲載ページ
宮城県	14、24
茨城県	26
長野県	18
静岡県	10
岐阜県	36
三重県	20
滋賀県	16
兵庫県	8
広島県	25
福岡県	22
大分県	6

【凡例】

❶JICA海外協力隊の方々（経験者を含む）については、次のように表記しています。

国際協子さん（ウガンダ・青少年活動・2019年度1次隊）
氏名　派遣国　職種　隊次

※「青年海外協力隊」以外のJICA海外協力隊（「シニア海外ボランティア」「日系社会青年ボランティア」「日系社会シニア・ボランティア」）の方々は、括弧内の冒頭に「SV」「日系JV」「日系SV」と記しています。

❷JICAの「企画調査員（ボランティア事業）」については、「VC」と表記しています。

本誌は、JICA海外協力隊が現地での活動・生活を円滑に行うための実践的な情報、および帰国後の進路開拓や社会還元に関する有益な情報を提供し、対象者に配布しています。

ロゴタイプデザイン：S+M DESIGN FACTORY
レイアウト：S+M DESIGN FACTORY
印刷・製本：弘報印刷（株）

Laos

他県の看護師隊員と協力し、二次救命処置の勉強会を開催

文 ＝ 細田実香（ほそだ みか）さん（ラオス・看護師・2017年度1次隊）

参加者に二次救命処置をイメージできるようにしてもらうため、隊員のみで行ったデモンストレーションの様子

開催の流れ	
〈1年前〉きっかけ	院内にある除細動器が故障し、使用困難となり、除細動器の必要性を考える。
〈6カ月前〉除細動器の購入検討	JICA事務所、病院側と話し合った結果、除細動器購入を検討する。
〈3～5カ月前〉心肺蘇生法の研修巡回	県病院の医師・看護師と共に、郡内の高校、警察署、警察学校に心肺蘇生法の巡回指導を実施する。
〈3カ月前〉除細動器の納品	県病院に除細動器が納品される。
〈2カ月前〉勉強会の準備	除細動器の使用方法をスタッフに指導したいと考え、SVに勉強会の協力依頼を行い、内容を検討する。
〈当日、2019年6月〉勉強会開催	県病院で勉強会を実施する。

ラオスの地方の県病院では重症患者を首都まで時間をかけて搬送します。普段は平坦な道ですが、夜は暗闇で街灯がなく、雨期になると洪水が起こることもあり、転院搬送には危険を伴うことがあります。また、ラオスの人々は体調が悪くなっても病院受診を嫌がることが多く、裕福な家庭では隣国のタイの病院まで行くこともあります。

あるとき任地であるパクサン郡内の高校生と警察官約400人に、一次救命処置である心肺蘇生を指導する機会がありました。同僚と一緒に高校と警察署を巡回し、心肺蘇生の指導を行いました。初めての試みであったため不安はありましたが、受講者は非常に熱心に講習会に参加してくれ、県病院の医師や看護師による今後の指導の経験にもつながりました。

しかし、病院にある除細動器[*1]が故障したため、患者が搬送されてきても使用できないという問題が起こりました。そこでJICA事務所、病院側と話し合った結果、除細動器を購入することになりました。除細動器の購入後、二次救命処置[*2]の勉強会を実施しようと考えましたが、除細動器は使用方法を誤ると命を落としかねないため、ひとりでの指導に踏み切れませんでした。そこで、首都で活動しているシニア海外ボランティア（SV）に協力依頼をし、勉強会の実現に至りました。

今回の勉強会はICU（集中治療室）とER（緊急救命室）の医師と看護師を対象としました。講師として、SVとそのカウンターパート、そして他県で活動している医療隊員にも来てもらい、英語とラオス語で勉強会を行いました。協力してくれた隊員は、私が指導できないところまで細かく教えてくれ、また実技では4～5人がひとつのチームとなり、購入した除細動器を実際に用いてチーム蘇生の練習をしました。みんなのおかげで安全かつ充実した勉強会を実施することができました。勉強会の後には同僚から、「とてもわかりやすい勉強会だった、自信がついたよ」と感想をもらえました。また、後日、同僚が実際の患者の急変時の後、「心肺蘇生法を自信をもって実施することができた」と、とても良い表情で教えてくれました。

ラオスの医療に関して、いろいろな課題はありますが、その中でも病院を良くしたいと考えているスタッフは多くいます。今回の勉強会を今後も院内で定期的に開催してもらい、ひとりでも多くのラオス人の命が救われることを期待しています。

修了証を手にした勉強会の参加者と隊員たち。修了証は隊員が作成し、勉強会終了後に渡した

＊1 除細動器…正常に拍動できなくなった心停止状態の心臓に対して電気ショックを与え、心臓を正常なリズムに戻すための医療機器。
＊2 二次救命処置…医師および十分に教育訓練を受けた看護師や救急救命士などが医師の指示のもとに医療用補助器具や薬剤などを用いて行う救命処置。

Brazil

ブラジルにおける日本の国際協力60周年を記念した野球教室と国際親善試合を実施

文 ＝ 佐藤山斗（さとうやまと）さん（日系JV／ブラジル・野球・2017年度1次隊）

野球教室での集合写真

開催の流れ	
〈4カ月前〉企画	共催する配属先や実施会場の検討。
〈3カ月前〉打ち合わせ	候補となる共催配属先との打ち合わせ。
〈2カ月前〉招待者決定	招待チーム、招待来賓の検討。
〈2カ月前〉手配	移動手段、宿泊先、記念品のデザイン検討。
〈1カ月前〉人数確認	子どもの参加人数の確認。
〈1カ月前〉内容確認	野球教室の内容の確認。
〈当日〉開催	国際親善試合と野球教室を行う。

2019年5月18・19日の2日間、サンパウロ市近郊にてブラジルにおける日本の国際協力60周年を記念し、日系社会青年海外協力隊による野球教室、国際親善試合が行われました。

「サッカー大国ブラジルに野球なんてあるの？」と思われる方もいると思いますが、1908年に日本からブラジルへ渡った移民の方たちがブラジルで野球の文化を広めたと言われており、今でも日系コミュニティを中心に野球が行われています。また、「ありがとうございます」や「三振」などの日本語も日常的に使われており、日本との強いかかわりを感じることができます。しかし、日系人の世代が変わるにつれて、野球人口も減少し、野球という文化が衰退してきているのが現状です。

イベント開催当時、ブラジルでは16人の野球・ソフトボール隊員が国内7州15都市にて活動していました。この16人という人数の多さを生かし、全員で野球教室を行えば、ブラジルにおける野球の普及という観点から、より大きなインパクトを与えられると考えました。また指導者の人数が充実することで、きめの細かい指導ができれば、教室に参加した子どもたちの技術向上にも寄与できると考えたことが、このイベント企画に至ったきっかけです。

イベント当日、地元の成人チームとの親善試合に臨むにあたり隊員全員が意識していたのは、「日本人らしいプレーを見せること」でした。試合前のノックや試合中の掛け声、全力疾走など日本では当たり前の姿勢を意識してプレーし、2試合ともJICAチームが勝利を収めることができました。「日本人はどのようにプレーするのか？」「日本の野球はどんなものか？」といった興味を持つ現地の方たちに、まさに「日本人らしいプレー」を見せることができたと思います。

野球教室には200人を超える参加者が集まり、隊員から指導を受ける子どもたちの楽しむ姿や真剣な表情を見ることができ、イベントを盛況のうちに終えることができました。私の配属先からも数人の子どもが参加し、その後の練習では野球教室で学んだことをしっかりと意識して取り組んでいます。また、子どもだけでなく保護者も「日本人らしいプレー」に感動し、「子どもにはぜひ野球を続け、躾や礼儀などを身につけて人間的に成長してほしい」とおっしゃっていました。

今後も、日系社会青年海外協力隊の活動はもちろん、このようなイベントを通して、ブラジル野球が発展していくことに期待したいです。

60周年記念イベントの式典の様子

ものづくり分野の活動ポイント

学ぶ技術が活用されている「現場」を体感させることを目的に「企業見学」を実施

信末健一（のぶすえけんいち）さん（ガーナ・電気・電子設備・2016年度4次隊）の事例

技術教育機関の電気・電子科で実習授業を担当した信末さん。現地で調達可能な材料による「実習」の導入に力を入れる一方、授業で学ぶ技術が実社会でどのように活用されているかを体感させるための「企業見学」も試みた。

「ものづくり」の技術指導の支援に携わる隊員には、「実習の材料が不足している」「教え子たちに基本的なスキルが欠けている」「教員自身も知識・技術のレベルが低い」といった共通の困難がある。それらにどう対処すべきか、同分野の活動事例をとおしてポイントを整理する。

信末さんが配属されたタマレ技術大学は、高校と大学が合わさった技術教育機関。電気・電子科の高校2年生を対象とする実習授業を担当することが、任期を通じてのメインの活動となった。

着任当時、同科は各学年に30人程度のクラスが1つずつあり、5人の現地教員が配置されていた。彼らが行う授業を見学すると、実習授業のコマでさえ、座学ばかりが行われていた。現地では「実習用キット」の入手が難しいこと、および教員たち自身に実習の授業を受けた経験がないため、キットを使わずに実習を行う方法を知らないことなどが原因のようだった。そうしたなかで信末さんは、現地で調達できる材料を使いながら、できるだけ多種の実習を行うという目標を立てたうえで、活動をスタートさせた。

「掛け算」からの出発

信末さんが授業を担当するようになったのは、着任の約1カ月後。まもなく、「実習の導入」以前の問題に直面する。生徒たちの深刻な「計算力不足」だ。たとえば、電気実習では「オームの法則」の公式を使った計算ができなければならないが、生徒たちはそれに必要な「掛け算」の力すら欠けていたのだ。そこで信末さんは、授業で毎回「計算テスト」を行うことにした。当初は20問の掛け算の小テストを自分でつくったが、のちに「百マス計算」に変更。当初、生徒たちは「電卓を使えば済む」と言ってテストを嫌がった。しかし、彼らは電卓の打ち間違えによって正解とかけ離れた数値が出ても、それに気づくだけの勘すら持っていなかったことから、信末さんはしぶとく継続。解答のスピードを競わせたところ、生徒たちは徐々におもしろがって取り組むようになり、解答のスピードも倍のレベルまで上がっていったのだった。

ブレッドボード*や抵抗など、実習で必要となる材料を現地の電気部品店などで調達し、授業で実習を行うようになったのは、着任の約半年後だ。行った実習は、「乾電池でLEDを光らせる」といった簡単な回路を作成しては、電流や電圧を測定して「オームの法則」を実証したり、「コンデンサ（蓄電器）」など各電子部品の特性を確かめたりする、基礎的なレベルのものが中心である。

＊ ブレッドボード…電子回路の試作に使う基盤。

信末健一さん

Profile

1989年生まれ、大分県出身。九州共立大学を卒業後、電気系の会社に勤務。2017年3月、協力隊員としてガーナに赴任。19年3月に帰国。現在は電気系の会社で再生可能エネルギー分野の業務を担当する。

活動の概要

タマレ技術大学（ノーザン州タマレ市）の電気・電子科に配属され、主に以下の活動に従事。

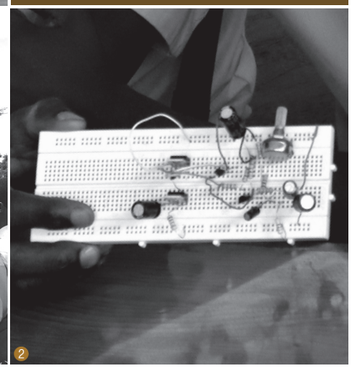
- ●実習授業の実施
- ●企業見学（ラジオ局）の企画・実施
- ●教員等を対象としたエレクトロニクス分野のワークショップの開催（他隊員との協働）

▶後輩隊員へひとこと

発想の転換を！

ものづくりの指導では、現地で調達できない材料があり、思うように実習ができないことも少なくないでしょう。そうしたなかで私が着想したのが、「ラジオ局の見学」。困難は、ときに新たな発想につながるのだと思いました。

CASE 1 機械分野の技術指導



❶生徒が製作中の「アンプ」の回路が設計図どおりかどうかを確認する信末さん（右）
❷ブレッドボードにコンデンサやトランジスタ（電気の流れをコントロールする部品）、スイッチなどの各種電子部品を配置した、生徒作の電子回路
❸ラジオ局での企業見学で、スタッフの説明を聞く生徒たち

配属先には教科書がなかったことから、信末さんは実習をする際は毎回、事前にその実習で身につける知識をまとめた資料をつくり、生徒たちに配布。それにより、彼らは「復習」して知識の定着を図ることが可能になった。

年度末には、それまでの授業の「集大成」となるような規模の大きい実習を実施。30個ほどの電子部品を使って「アンプ（増幅器）」を製作するものだ。生徒たちはスマートフォンを持っていた。そこに保存してある彼らが好きな音源を、製作したアンプで増幅してスピーカーで流せば、「電子回路」に対する彼らの興味が高まるだろうと考えたのだった。

回路の設計自体は高度な知識が必要なため、信末さん自身が実施。つくった図面を生徒たちに渡し、そのとおりに回路をつくるという課題を与えた。1カ所でも配線の仕方を間違えてしまえば、アンプとして機能しない。30個におよぶ部品を正確に配置していく作業は生徒たちには難易度が高かったが、信末さんのフォローでなんとか完成。スマートフォンとスピーカーにつないで音が出たときの生徒たちの興奮は、期待どおりのものだった。

社会の「現場」が生徒たちを刺激

信末さんは着任当初から、電気や電子にかかわりのある企業を生徒たちが見学する機会を設けたいとの希望を持っていた。自分たちが授業で学んでいる技術が活用されている現場を見れば、彼らの学習意欲がさらに高まると考えたからだ。その実現に向け、アイデアを具体化させ始めたのは、任期の半ばごろ。電気・電子科のシラバスの「ラジオ」の単元には、「ラジオを分解し、その仕組みを学ぶ」という課題が記載されていた。ところが、配属先には実習に使えるラジオはなかった。結局、「ラジオ」の単元は座学どまりとせざるをえなかったが、その埋め合わせになるかもしれないと思いついたのが、生徒たちが「ラジオ局」を見学するプログラムだった。

同僚に相談すると、偶然、彼はかつてラジオ局でインターンシップをしたことがあり、その企業とつないでもらうことができた。配属校から歩いて30分の場所にある、国営のラジオ局だった。

見学が実現したのは、任期の残りが約半年という時期だ。当日の参加者は三十数人。「スタジオ」や「送信機室」など、局内の各所を回り、それぞれで使われている設備や機械についてラジオ局のスタッフから説明を受けた。初めて足を踏み入れた世界に生徒たちの目は輝き、「このボタンは何ですか？」などと、説明役のスタッフに矢継ぎ早に質問をするのだった。

そうして「企業見学」の意義を実感した信末さんは、「携帯電話会社」など、ほかの業種の企業見学も企画したが、時間が足りずに断念。ラジオ局の見学に同行した同僚にその実現を委ねて、帰国の途についたのだった。 C

CASE 2

アパレル分野の技術指導

「デザイン」への興味を引き出し、「ものづくり」の楽しさが実感できる授業方法を提案

中村真奈（なかむらまな）さん（スリランカ・服飾・2016年度2次隊）の事例

職業訓練校を巡回し、洋裁授業の質向上を支援した中村さん。「縫製」の基礎技術の向上が必要な教員たちにそれを伝える一方、「デザイン」への興味を引き出すような授業方法の提案・導入にも力を入れた。

中村真奈さん

Profile

1988年生まれ、兵庫県出身。上田安子服飾専門学校を卒業後、アパレル会社に就職し、企画開発・デザイン・販売を経験。2016年10月、協力隊員としてスリランカに赴任。18年10月に帰国。

活動の概要

東部州トリンコマリー県にある、東部州政府農村開発局に配属され、同県内の各地にある職業訓練校を対象に、洋裁に関する主に以下の活動に従事。

- ●洋裁授業の質向上に向けた支援
- ●教員を対象にした勉強会の開催
- ●生徒が授業で製作した浴衣のショーの企画・運営
- ●生徒が授業で製作したドレスのコンテストの企画・運営

中村さんが配属されたのは、東部州政府の農村開発局。求められていた活動は、州都があるトリンコマリー県内の職業訓練校10校を巡回し、洋裁授業の質向上を支援することだった。

巡回先の職業訓練校は、いずれも女性の自立支援を目的に配属先が設置・運営するもので、1年制。10代後半から30代を中心とする女性を毎年、30～40人ずつ受け入れていた。各校に配置されていた教員は1人ずつ。彼女たちは、「洋裁」や「手工芸」、「料理」など数種の授業を一手に引き受けていた。

着任の約1カ月後には、各校で新年度（2017年度）の授業がスタート。まずはそれぞれの洋裁授業を見学させてもらい、課題を探った。「ものづくり」には、仕上がりを構想する「デザイン」と、それを現実のものに仕上げていく「手仕事」という2つの要素がある。各校の授業では、いずれについても課題が見られた。洋裁で「手仕事」に当たるのは「縫製」だが、教員自身の基礎技術をもう少し向上させる必要性が感じられた。一方、「デザイン」については、教員たちに新しいことに挑戦しようとする姿勢があまり見られず、同じデザインのものを毎年使い回している印象だった。基礎縫いの練習を終え、「バッグ」など具体的な物の製作課題に進む際、生徒たちはすぐに「どのようなデザインにすれば良いですか？」と教員に聞く。すると教員も、「あなたはこのデザイン」とすぐに指定してしまい、考える力を伸ばそうとする指導にはなっていなかった。

＊ 基礎縫い…「縫う」「留める」「しつける」など基本的な縫製技術。

そうして中村さんは、着任の半年後、「縫製」と「デザイン」の両方について、授業内容をより充実したものにするという活動方針を設定した。

「縫製技術」に関する指導

教員たちの縫製技術の底上げを図るために中村さんが最初に試みたのは、「勉強会」の開催だ。配属先では月に1回、各校の教員による会議が行われていた。中村さんはその機会に縫製技術の勉強会を開くことを提案。しかし、1度は実現したものの、縫製技術は短時間で身に付くものではなく、早々に頓挫する。

そうして中村さんは、教員たちが行う授業をサポートするなかで、彼女たちに縫製技術を伝えていこうと方針転換。まずは、縫製技術の良し悪しを判定するポイントをまとめた「チェックリスト」を作成し、彼女たちにその活用を勧めた。しかし、これもうまくはいかなかった。チェックリストの必要性や重要性をうまく伝えることができなかったのだ。

中村さんが次にとった方法は、自身がメインとなって授業を行い、そこにサポート役として教員たちに入ってもらいながら、縫製技術を学んでいってもらう時間を設けること。任期が半ば近くになったころから、ときどき各校で授業を持たせてもらうようになっていった。複雑な縫製技術については、図解するマニュアルを作成し、生徒だけでなく、教員にも配布。教員たちにそれを頼りに指導の一部を分担してもらうと、ようやく彼女たちは技術の「勘」をつかむようになっていったのだった。

「デザイン」に関する指導

「デザイン」の指導で中村さんが重視したのは、「ステップ」を踏むことだ。「一から自由にデザインする」という課題をいきなり与えても、難しいだろうと考えた中村さんは、まずは作品の一部をオリジナルのデザインにするという課題を与えてみた。たとえば「枕カバー」の製作実習。従来、「ハンドペイント」だけのデザインで行われていたが、一部に好きなやり方で「刺繍」を組み込ませてみた。刺繍は、生徒たちがほかの授業で習う技術。すると生徒たちは「デザイン」のおもしろさを実感し、課題に意欲的に取り組むようになったのだった。

デザインに対する生徒たちの興味の高まりを感じた中村さんは、17年度の終盤、あるプロジェクトを企画する。生徒たちがスリランカの伝統布で「浴衣」をつくり、そのファッションショーを開催するというものだ。

この企画に手を挙げたのは、巡回先のうちの3校。日本の伝統衣装とスリランカの伝統布という「組み合わせの妙」で、それまで見たこともない雰囲気の作品が生まれていく――。生徒たちは製作に熱中し、ショーの後には彼女たちから、「一日限りの日本に行ったみたいで、本当に楽しかった」といった言葉が聞かれたのだった。

こうしたプロジェクトが「卒業製作」として定着するかもしれないと感じた中村さんは、翌18年度の末には、「洋裁」で同様の取り組みを行った。前回から変更したのは、「コンテスト形式」にした点。生徒たちがつくったドレスの出来栄えだけでなく、ランウェイを歩く「ウォーキング」や「ヘアメイク」などの自己表現、「トータルコーディネイト」でのデザインの出来栄えを審査対象に順位を付ける催しとした。作品を着てランウェイを歩いたのは、それをつくった生徒自身。審査員は、JICA事務所のスタッフや配属先の同僚などに依頼した。

このコンテストに参加したのは6校。生徒たちが一から自由にデザインしてつくったドレスの魅力と多様さを目の当たりにした各校の教員たちは、「生徒たちがこんなにも『表現』ができるんだ」と述懐。「デザイン」の指導の重要性を感じ取ってくれたようだった。

❶任期の2年目に行った洋裁のファッションコンテストで、自分がつくった作品をまとってランウェイを歩く生徒
❷「実習で使う布が調達できない」と言う生徒が多かったことから、中村さんは地域のテーラーから端切れを譲り受け、生徒たちに提供。写真は、端切れを使って生徒たちが製作したテディベア
❸任期の1年目に行った浴衣のファッションショーで、自分の作品をまとった生徒たち
❹足踏みミシンで浴衣を縫う生徒

▶後輩隊員へひとこと

楽しみながら、ともに学ぶ姿勢を！

活動先にあったミシンは「足踏みミシン」。私は着任するまで使ったことがなかったのですが、現地の先生たちに使い方を教わることから活動を開始。「現地の人たちと共に成長することを楽しむ」というスタンスが、協力隊活動には欠かせないものだと実感しました。

CASE 3

メーカー工場での技術指導

中小の製造業社の工場を回り、従業員たちが自力で職場改善を進めていく手法を伝授

武藤（むとう）正（ただし）さん（SV／ベトナム・品質管理・生産性向上・2016年度4次隊）の事例

中小の製造業社を対象に、品質管理レベルや生産性の向上支援に取り組んだ武藤さん。「どこをどう改善すべきか」という「答え」を教えるのではなく、改善すべき箇所やそれを改善する方法を自分たちで見つけ出していく手法を伝えることに徹底した。

武藤さんが配属されたのは、ハイフォン市計画投資局の企業管理・開発課。中小企業への各種支援を行う部署だ。ベトナム北部最大の港湾都市である同市には、電子・電機、化学、食品など各種製造業の工場が置かれている。武藤さんに求められていたのは、中小の製造業者を対象に、工場の品質管理レベルや生産性を向上させるための指導を行うことだった。

複数の企業を対象にセミナーを開くこともあったが、指導方法のメインは「巡回指導」だ。調査目的で各社を訪問し、「改善の意欲があるか」「改善を担う人材がいるか」といった点を確認したうえで、対象企業を絞り込んでいった。そうして任期の前半は5社、後半は6社を対象に巡回指導を実施。「プラスチックバッグ製造」「機械部品製造」「水産加工」「印刷」など、業種はさまざまだ。

各社を訪問する頻度は2週に1度ずつ。毎回、次の訪問時までに取り組む改善活動を宿題として出し、次の訪問時には宿題の出来栄えを踏まえてアドバイスを行った。

「答えの出し方」を指導

武藤さんが日本で勤めていたのは化学メーカーであり、巡回指導の対象企業の大半は「専門外」の業種だった。そうした企業では、どこをどう改善すべきかを具体的に指摘するのは難しかった。そこで武藤さんが立てた指導方針は、『魚』を与えるのではなく、『魚の獲り方』を教える」というもの。「どこをどう改善すべきか」という「答え」を伝えるのではなく、従業員が自力で問題点や解決策を見つけ出していく手法を伝えることにしたのだ。実際に伝えたのは、日本の製造業社がよく取り入れている以下のような手法である。

「小集団活動」 従業員が数人ずつのグループに分かれ、定期的にミーティングを開きながら、職場の問題を見つけ、その解決に取り組んでいく手法。

「なぜなぜ分析」 職場の問題について、それが発生した直接の原因を考え、さらにその原因を考えるということを5回にわたって繰り返すことで、問題解決の適切な方法を見つけ出す手法。

「PDCAサイクル」 仕事を実行した後にかならずそれを振り返り、問題点があれば改善策をとっていく手法。

「5S」 不要なものをなくす（整理）、残したものを取り出しやすい状態に置く（整頓）、掃除をする（清掃）、きれいな状態を維持する（清潔）、ルールの設定・遵守により整理・整頓・清掃・清潔を定着させる（しつけ）というステップで、職場環境の改善を図る手法。

武藤さんは各巡回先で以上のような手法を教え、その実践を「宿題」として出し、やり方について助言を重ねていった。そうした指導で心がけたことのひとつは、従業員たちがなかなか見つけ出せずにいる職場の問題点や解決策について、たとえ自分が解っていても、それを彼らに教えることはしないということだ。目指すのは、巡回先を改善することそのものではなく、「自分たちで問題を発見、解決する力」をつけてもらうことだったからだ。

巡回指導で武藤さんが心がけたもうひとつのことは、従業員たちが職場の問題の改善に取り組んだら、かならずその効果の「見える化」を図ることである。たとえば、作業の省力化が叶った企業があったら、『単位時間あたりの人件費』×『省くことが叶った作業時間』でコストダウンの具体的な金額を算出し、その企業に示した。

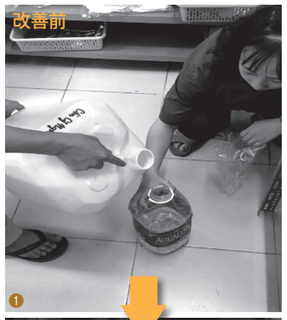
以上のような武藤さんの指導は、効果が顕著だった。「道具をうまく使うことで、それまで2人がかりでやっていた作業を1人でこなせるようになった」など、自分たちの工夫次第で生産性が大きく向上することをひとたび実感すると、巡回先の従業員たちは俄然、職場改善の活動に力を入れるようになったのだ。そうして、武藤さんの指導期間中に10～30パーセントの生産性向上や5Sの定着が巡回先の多くで実現。なかには、従業員の努力で省力化が進みすぎたため、従業員の15パーセントほどが解雇されることになってしまった企業もあった。

人材の流動性への対処

巡回指導に思わぬ「穴」があることに武藤さんが気づいたのは、任期も半ばになるころだ。巡回先ではそれぞれ「カウンターパート役」を任命してもらい、指導する手法の細かな点は主に彼らに伝えていった。ところが、そうした人材が転職で去り、それまでの指導が水の泡になってしまうケースが相次いだのだ。ベトナムでは転職が日常茶飯だった。

武藤さんは以後、そうした事態を避けるための対策をとるようになった。「できるだけ多くの従業員に手法の細かな点を伝える」「できる限り社長にも手法の細かな点を伝える」「社内に『改善推進チーム』を設置してもらうなどして、改善活動が各社で『制度』として進められるようにする」という3つだ。

これらのうち、「できる限り社長にも手法の細かな点を伝える」という対策は、改善活動の持続が可能になるだけでなく、改善活動の活発化にもつながった。「小集団活動」などの手法は、いずれも従業員が主体となって改善を進めていく「ボトムアップ」の取り組みであり、日本の企業風土にはマッチしている。一方、ベトナムの企業は日本と比べると「トップダウン」の傾向が強い。そうしたなか、「ボトムアップ」の手法に社長にも強く関与してもらうという武藤さんの工夫は、言わば日本の技術をベトナムの環境に合うようカスタマイズして導入することにほかならなかったのだ。



❸❹プラスチックバッグ製造会社で実践されるようになった「5S」による職場改善の例。❸はビニールロールや道具が散乱している改善前の工場。❹は改善後の工場。5Sの徹底を呼びかける看板も掲げられている

❶❷巡回先の機械部品製造会社で「小集団活動」により実現した職場改善の例。部品の洗浄に使うアルコール溶媒を子分けにする作業が、以前は2人がかりで行われていたが（❶）、給油用のポンプを使って1人で行うようになった（❷）

武藤　正さん

Profile

1955年生まれ、静岡県出身。名古屋大学大学院修士課程を修了後、ドイツ系化学会社で製品開発、品質管理、製造管理に携わる。定年退職後の2017年3月、シニア海外ボランティアとしてベトナムに赴任。19年3月に帰国。

活動の概要

ハイフォン市計画投資局に配属され、市内の中小企業を対象とする主に以下の活動に従事。

- 品質管理レベルや生産性の向上に向けた巡回指導
- 品質管理レベルや生産性の向上に関するセミナーの開催

▶後輩隊員へひとこと

経験をフル活用して！

活動で専門外の知識が必要となり、とまどうこともあるでしょう。しかし、それまでの経験で知らず知らずに体得したスキルのなかに、何かの役に立つものがあるはず。自分の経験のなかの「生かすポイント」を探る視点を持ってみてください。

協力隊技術顧問が回答
活動Q&A集

JICA海外協力隊への技術支援を目的に、分野ごとに配置されている技術顧問。派遣中隊員から寄せられた活動に関する相談と、それに対する技術顧問による回答の例をご紹介します。

回答者
荒（あら） 柾文（まさふみ）さん
●元JICA技術顧問
（担当分野：障害児・者支援）
●回答時：いわき明星大学大学院 講師
●現在：NPO法人ユニバーサルデザイン結 理事

障害児への刺繍や裁縫の指導について

知的障害児を対象に手工芸の指導を行う手工芸隊員より

Q1

何の障害かわからないのですが、以下のような行動を示す16歳男子（以下、B君）の対応について悩んでいます。私の言うことは理解できますが、自分から言葉を発することはなく、時々短い言葉で返事をします。パズルが好きで、簡単な刺繍や裁縫はできますが、アトピーがあり、ストレスが高まると、噛みつき、わめき散らし、走り回ります。ハサミで周りの物を何でも切り刻み、ほかの利用者の迷惑になっています。危害を加えないか心配です。

A1

B君の障害は推測ですが、自閉的な傾向のある知的障害児と思われます。

【安全・パニックへの対応について】

❶ハサミを取り上げるのは、パニックを誘発する要因になりかねませんので推奨できません。

❷可能なら、先が丸い安全なハサミの使用を検討しましょう。

❸パニックが起きたら、ほかの利用者に危害が及ばないように保護します。その上で、外に連れ出す、静かな部屋に誘導するなどして、落ち着かせます。好きなパズルに取り組ませるのもいいでしょう。

❹パニックがどのような時間帯に、どのような背景で起こるのか、チェックします。アトピーの痒（かゆ）さがパニックを誘発させる要因のひとつということですので、痒みがひどくなる前に、「汗をかいたら拭く」「シャワーを浴びて体を冷やす」などをさせてみてください。

【日常生活における環境の整備について】

❶活動時はほかの利用者と対面で、または並列的に座らせないで、できたら部屋のコーナーや壁に向かって座らせ、課題に集中できるような場面設定も考えましょう。

❷活動の見通しが持てるよう、一日の個別スケジュールを準備するといいでしょう。

❸指示は言葉だけでなく、写真・絵カードなどの視覚情報手段を多く使用しましょう。

【作業への参加のさせ方について】

❶好きなこと、得意なことを活用します。例えば、紙を同じ長さに切るのが得意ならば、その練習をした後、紐を同じ長さに切る作業をB君に任せてみてください。

❷長時間の作業はストレスを高める誘因になる場合が多いので、集中が途切れる前に、休憩をとる、外に連れ出す、ほかの好きなこと（パズル）に誘導するなどしてください。

❸B君自身が一つ一つの作業の始めと終わりがわかるように工夫しましょう。

※配属先の実情や環境に合わせて、できそうなことに取り組んでください。

派遣国で普及し始めたハイブリッド車について

職業訓練校で活動する自動車整備隊員より

Q2

私の派遣国ではハイブリッド車（以下、HV）の割合が高まっています。そのため、先日、配属先からその整備について講習をしてほしいと言われました。現地には対応する故障診断器（スキャン・ツール）もなく、資料も不足しており対応に苦慮しています。

A2

一般に、先進国で10年落ちの中古車が途上国に輸出されるケースが多く、私が協力隊員であった1990年代は、日本では電子制御式エンジンが普及していましたが、派遣国のザンビアではキャブレータ（気化器）式の中古車が大半でした。その後、私がSVとして赴任した2005年ごろのカンボジアでは、すでに電子制御式の中古車が主流となっていましたが、日本ではHVが普及し始めており、私も配属先の職業訓練校の教員向けにHVの整備技術に関する講習会を開催しました。教材はなかったため、資料を自作し、座学のみ実施しました。

現在はHVの中古車が途上国へも輸出されています。また、ブータンのようにHVや電気自動車の普及を政策で推進する国もあります。そこで問題になるのがメインテナンスです。最近は協力隊の要請内容にもHVの技術指導を含むものがあり、活動上の課題となっています。

近年の車両の整備には故障診断器を用いますが、協力隊の派遣国で普及しているとは限りません。また、赴任後に急遽HVの技術指導を依頼されるケースもあります。そこで、故障診断器を使用しなくても可能な作業やその注意点を紹介します。

回答者
澤山晃一（さわやまこういち）さん
●JICA海外協力隊技術専門委員
（担当分野：自動車整備、板金、等）
●日本自動車大学校 自動車研究科 講師
●1級自動車整備士

【ダイアグノーシス・コード点検（エンジン）】DLCコネクタの該当端子を短絡し、ランプの点滅によりコードを読み取り、指定ヒューズを抜き取り消去します。ただし、HVシステムの点検には故障診断器が必要です。

【安全管理】HVはバッテリ電圧が200V以上、昇圧後の駆動電圧は最大650Vです。オレンジ色の高電圧配線にかかる作業では、サービス・プラグを取り外し、絶縁防具を使用する感電防止策の励行が重要です。

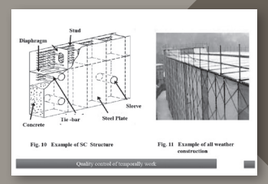
【エンジン整備】HVのエンジンは自動的に始動・停止するため、点検・整備のためにはエンジンを連続運転する整備モードへの移行が必要です。

【ブレーキ整備】HVのブレーキ・フルードの交換、エア抜きは、ブレーキ制御禁止モードへ移行して実施します。

以上は、トヨタ・プリウス30型を例としますが、各作業方法はインターネットでも検索可能です。「与えられた環境で、何ができるか」の探求こそ、協力隊活動の最大のおもしろさと言えるのかもしれません。

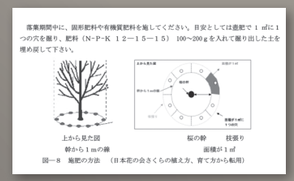
ボランティア成果品 Pick Up（ものづくり分野）

『The Proceedings of Seminars』



作者　ベトナムのSV（建築）
内容　実施した建築技術の各種セミナーの教材をまとめたもの
形態　カラー・約200ページ・英語
構成　❶建築物の保全
❷高層ビル正面部分の風への抵抗
❸日本建築学会の建築工事標準仕様書「JASS 5N」の概要
❹日本の原子力発電所の設計例
❺日本の原子力発電所の認可プロセス
❻日本の原子力発電所の一時的な作業の品質管理

『サンパウロ市カルモ公園桜調査報告書』



作者　ブラジルの日系SV（造園）
内容　桜が植栽されている同国内の公園における桜の育成上の問題を見つけ出し、その対策を検討するために行った調査の結果をまとめたもの
形態　カラー・約60ページ・日本語
構成　❶調査の概要
❷調査の前提条件の整理
❸調査結果
❹更新エリアの調査結果
❺管理上の問題点と対策方法
❻今後の目標の検討

＼ 特集2 ／

“美徳”を伝える活動

「時間を守る」「ポイ捨てをしない」「人の話を静かに聞く」など、日本で「美徳」とされる態度は、仕事や学習を充実させるためにも不可欠なもの。しかし、協力隊員の派遣国ではそうした態度が軽視されているケースも少なくない。本特集では、「美徳」を現地の人たちに伝えることに力を入れた事例をピックアップする。

遅刻・無断欠席

CASE 1

安達夏美（あだちなつみ）さんの事例
（モンゴル・テニス・2016年度3次隊）

安達さん基礎情報

PROFILE

1990年生まれ、宮城県出身。東洋英和女学院大学国際社会学部を卒業。小学生のときにテニスを始め、大学時代まで選手として活躍。大学卒業後、美容商材の専門商社勤務を経て、2017年1月、協力隊員としてモンゴルに赴任。19年1月に帰国。

活動概要

モンゴルテニス協会とグローバル・インターナショナル・スクールに配属され、主に以下の活動に従事。
- ●テニス教室での指導やその運営指導
- ●テニスの動画教材の作成
- ●指導者の指導法の矯正

1 指導したテニス教室の生徒と安達さん（右）。生徒たちは当初、指導者の話を聞くときにラケットを振り回すなどしていたが、「練習の始めと終わりは一列に並び、ラケットは胸の前で抱えて振り回さない」というルールを導入したところ、実践されるようになった

2 10月から4月までは気温が氷点下になるため、体育館が練習場となった

3 安達さんはウォーミングアップやトレーニングの方法などを紹介するモンゴル語の動画教材を作成し、YouTubeで配信。テニスの普及にも努めた

「本気」で向き合ったことで同僚の遅刻や無断欠席が改善

少年が通うテニス教室で現地のコーチとともに指導にあたった安達さん。テニスの指導だけでなく、彼らの「遅刻」や「無断欠席」を減らすための指導にも力を入れた。

安達さんの赴任当初の配属先は、モンゴルテニス協会。当時、協会は首都を中心に計4つのテニス教室を運営していた。いずれも民間企業などからの寄付で運営資金をまかなっており、生徒から月謝は取らない。学校を回ってスポーツテストを行い、上位の子に入部の資格を与えていた。

安達さんのメインの活動となったのは、首都にある協会のテニス教室の一つで、協会に所属する40代の男性コーチ（以下、Aさん）とともに指導にあたることだ。

生徒数は20～30人で、年齢は6歳から12歳まで。練習場所は、気温が氷点下となる10月から4月までは私立学校の体育館を有料で借り、それ以外の時期は無料で解放されている国立公園内の野外のテニスコートを使った。同国の学校は2部制であり、午前に授業がある生徒と午後に授業がある生徒がいたことから、テニスの練習は一日2、3回に分けて行い、生徒たちは自分の授業がない時間帯の練習に参加することとなっていた。

「叱る」から「褒める」に

安達さんが「洗礼」を浴びたのは、練習に初めて参加した日のことだ。開始予定の9時になっても、生徒の姿が見えない。30分ほど経ってようやく集まり始め、全員がそろったのは10時を回るころだった。

翌日以降、しばらく様子見を続けたが、生徒たちの遅刻は毎度のことで、さらに「欠席するときには連絡を入れる」という習慣もないようだった。

子どもたちへのスポーツ指導には『教育』の側面もある――。そう考えた安達さんは、テニスの技術を伝えるだけでなく、「遅刻」や「無断欠席」を減らすための指導にも力を入れることにした。

当初は、遅刻や無断欠席をした生徒を叱り、改善を促すようにしていたが、一向に効果が見られなかった。「戦略」が必要だと感じた安達さんは、意識して次のような方法をとるようになった。

❶遅刻や無断欠席をした生徒を叱るのではなく、時間どおりに来た生徒や、欠席の連絡を入れた生徒を褒める。

❷「30分の遅刻が毎日続くと、一年間、2年間でどれだけの練習時間が失われるか」「体育館の利用料が無駄になってしまう」など、遅刻や無断欠席のデメリットを伝える。

❸生徒の保護者に、遅刻や無断欠席を減らすために協力してほしい旨の手紙を渡す。

以上のような働きかけを継続的に行うことで、生徒たちの態度は徐々に変化。着任して一年ほど経つころには、9割方の生徒に遅刻や無断欠席がなくなった。

「20分ルール」の試み

遅刻や無断欠席は、生徒だけでなく、Aさんの問題でもあった。安達さんの働きかけによって、生徒たちの態度が良い方向に変わり始めても、Aさんは遅刻や無断欠席を止めなかったのだ。

遅刻・無断欠席の問題は途上国ではよく見られるものなのかもしれないが、子どもたちのテニスのレベルを向上させるためには、指導者にも変わってもらう必要がある。そう考えた安達さんは、年長者であるAさんに遠慮する気持ちもあったが、彼にも態度を改めるよう働きかけることにした。

まず、日々の練習で遅刻を減らそうと声がけをしてみた。しかし、なかなか思いが伝わらない。

そこで安達さんは、「Aさんが20分遅刻をしたら、その日の練習は中止にする」という厳しいルールを提案する。反発されることを予想していたが、Aさんはこのルールを受け入れてくれた。

ところが、Aさんは早くも翌日の練習で20分以上の遅刻をしたのだ。そこで安達さんは意を決し、練習場を後にした。帰った後、練習を止めたことに激怒するAさんから電話がかかってきた。

初めて「練習に行きたくない」と思うようになった安達さんだったが、翌日も恐る恐る練習場に足を運んだ。すると、Aさんは5分ほどの遅刻で到着。そうして、安達さんが練習を止めて帰った日をきっかけに、Aさんの大幅な遅刻はなくなっていったのだった。

腰を据えた話し合い

数日後、「20分ルール」は一方的な押し付けだったのでは……と安達さんは感じるようになる。そこで、あらためてAさんとの話し合いの場を設けてみることにした。

指導者が遅刻や無断欠席をしていては、子どもたちに教育できないこと、練習の開始が遅れると体育館の利用料が無駄になってしまうことなどについて、Aさんに丁寧に話をした。するとAさんは、初めて自分がシングルファーザーであることを打ち明ける。学校に通う2人の娘の送り迎えをしなければならないため、朝はどうしても定時に着くことはできないのだと説明。それでもAさんは最後に、「でも、なるべく早く来るようにする」と言ってくれた。

以後、Aさんは安達さんの任期終了まで、大幅な遅刻や無断欠席がない状態を続けてくれた。

「テニスが上手くなりたい」「試合に勝ちたい」。そんな生徒たちの思いがあるからこそ、「時間を無駄にしない」「時間を守る」という指導にも注力した安達さん。「本気」を見せれば、大人も習慣を改めてくれる――。Aさんとの一件で、安達さんはそう実感したのだった。 C

1 村島さんと同じ教会に通う住民を相手に行った、BMIや栄養に関する啓発講習
2 配属先のベッドのシーツを川で洗う同僚たち
3 村島さんが作成した職員会議開催の告知ポスター
4 配属先の建物から海辺のゴミ処理場へと続く道で草刈りを行う同僚たち
5 配属先の外観

職場の美化

村島正江（むらしまさえ）さんの事例
（ソロモン・看護師・2016年度4次隊）

CASE 2

村島さん基礎情報

PROFILE

1978年生まれ、滋賀県出身。病院の看護師や、小規模多機能型居宅介護支援事業所の介護支援専門員兼看護師として働く。2017年3月に協力隊員としてソロモンに赴任。19年3月に帰国。

活動概要

セゲ地域診療所（ウエスタン州）に配属され、主に以下の活動に従事。

- ●配属先の業務の支援
- ●配属先スタッフによる月例会議の企画・実施
- ●保健に関する住民への啓発活動の実施

特集2 “美徳”を伝える活動

「職員会議」の導入により、職場の環境改善が促進

医療施設に配属され、地域住民への保健に関する啓発などに取り組んだ村島さん。「職員会議」の定例化を提案・実現したところ、施設の衛生管理の改善へとつながった。

ソロモンでは、ひとつの州が「ゾーン」と呼ばれる行政区画に分けられ、各ゾーンに基幹の医療施設として「病院」や「地域診療所」が置かれている。村島さんが配属されたのは、約1万5000人という人口規模のゾーンに置かれた地域診療所だ。配属先の医療スタッフは、統括する看護師長以下、助産師、正看護師、看護助手、薬剤師など計10人ほど。そのほか、清掃員、運転手が1人ずつ配置されていた。

村島さんの活動は二本柱。ひとつは、保健に関する住民への啓発活動だ。配属先の事業には、管轄地域の小学校を回り、児童を対象にワクチンの接種や健康診断を行うこと、および僻地の村に赴き、そこの住民に診療を行うことが組み込まれていた。村島さんはそうしたアウトリーチに同行し、訪問先の児童や住民を対象に「手洗い」や「生活習慣病」などに関する啓発講習を行った。

村島さんの活動のもうひとつの柱は、配属先の業務改善への支援。当初から「現地の人とともに働く」をモットーにしていた村島さんは、同僚たちと同じ業務をこなしながら、そのなかで見えてきた問題点につき、改善に向けた働きかけをした。

院内感染のリスク

村島さんが配属先の業務について問題だと感じたことのひとつは、「院内感染」のリスクだ。配属先内には各所にゴミ箱が置かれ、傷の処置に使った血が付いた脱脂綿など、院内感染につながるゴミが入れられていた。ゴミ箱に溜まったゴミは、配属先の建物の近くにある海辺のゴミ処理場に持っていき、同僚たちがみずから埋めたり、燃やしたりして、処分することとなっていた。しかし、配属先内のゴミ箱には何日にもわたってゴミが溜められ、満杯になってからゴミ処理場に運ばれていた。感染の危険性があるゴミが長い間配属先の施設内に留められていれば、それだけ院内感染のリスクは高まる。

ゴミ箱にゴミを溜めてしまう原因のひとつに、「草刈り」があった。配属先の建物からゴミ処理場までの通路は舗装されておらず、放っておくとすぐに雑草が伸びて歩きづらくなる。配属先の清掃員はシーツの手洗いなどほかの作業で忙しいため、草刈りは従来、「気になった人がやる」という習慣になっていた。しかし、自発的にそれを引き受ける同僚は少なく、たいていは看護師長がひとりでやっているような状態だった。結果、その道は雑草が伸び、歩きづらくなる期間が長くなり、ゴミを運ぶのが億劫になってしまうのだった。また、雑草が伸びていれば、マラリアを媒介するハマダラ蚊をおびき寄せることとなるため、来院する患者のマラリア感染のリスクを高めることにもつながってしまっていた。

ゴミ処理の問題について、村島さんは同僚たちに個別に意見を伝えてみた。しかし、改善に向けた行動にはつながらない。かといって、村島さんは自分で草刈りをやってしまうことは差し控えた。自分が帰国した後、元の不衛生な状態に戻ってしまうことが目に見えていたからだ。

そうしたなか、問題解決の足がかりとなったのは、村島さんの働きかけで実現されるようになった、配属先スタッフによる「職員会議」だ。

草刈りの習慣が定着

従来、看護師長が外部の会合に参加しても、そこで仕入れた情報が配属先内に共有されるということがなかった。そうした情報共有の機会をつくる必要性を感じていた村島さんは、着任の半年後、自身の活動計画を立てるために看護師長と話し合った際、「職員会議を開きませんか」と提案した。すると彼は、「私もやりたいと思っていた」と賛同。彼はかつて開催を試みたことがあったが、一部のスタッフにしか参加してもらえなかったようだった。現地の人たちには、「相手に何かを強く要求し、人間関係に軋轢を生むこと」を避ける傾向にあり、看護師長も不本意ながら会議の開催をあきらめてしまっていたのだ。そうしたなかで村島さんは、いずれ去る「よそ者」の立場を生かし、人間関係の軋轢を恐れずに同僚たちに会議への参加を呼びかける役目を担うこととなった。

会議は月に1度、検診などが入っておらず、比較的業務量が少ない水曜日の朝9時から行うこととなった。村島さんは開催の数日前に告知の紙を配属先内に掲示。その後、同僚たちに何度も口頭でリマインドした。同僚たちが住んでいるのは、配属先の脇に立つ社宅。会議開催の当日は、彼らの家を回って出席を求めた。嫌がられはしたものの、その時期にはすでに同僚たちとの信頼関係が出来上がっていたため、「マサが言っているから仕方ない」と、みな重い腰を上げてくれるのだった。

職員会議の導入にはいくつもの効果があった。そのひとつが、「ものごとの決定」がはかどるようになったことだ。同僚たちの勤務が夜勤を含むシフト制だったこともあり、従来、全員の都合を取りまとめて「学校訪問の日」や「巡回診療の日」などを決めるのに時間を要した。ところが、会議でこれらを議題にあげると、その場で決まるのだった。

ゴミ処理の問題についても同様だ。村島さんがこのテーマを議題にあげると、「定期的に全員で草刈りをする」「毎勤の終わりに、ゴミ箱に溜まったゴミをゴミ処理場に持っていく」といったルールが、会議で難なく決まっていった。みんなで顔を付き合わせて決めたことであるため、同僚たちには「守らなければならない」という責任感が生まれ、実践も確実になされた。

職員会議をきっかけに業務改善が進み、その意義が実感できるようになると、同僚たちは村島さんに尻を叩かれずとも会に出席するようになっていった。そうして、職員会議は村島さんの任期終了まで途切れることなく継続した。同僚たちは3、4年で異動となるのが通常。「会議で職場を改善していく」という習慣が、彼らの異動によって他の医療施設へと伝播していくことも期待される。

地域住民の意識向上を目的に、子どもたちと「ゴミ拾い」を継続

農業普及所に配属され、住民グループを対象に収入向上活動の支援などに取り組んだ徳竹さん。来たるべき経済発展の時代への備えとして、「ゴミ」に関する地域住民への啓発にも力を入れた。

地域の美化

徳竹野原（とくたけ の はら）さんの事例
（マラウイ・コミュニティ開発・2016年度3次隊）

CASE 3

徳竹さん基礎情報

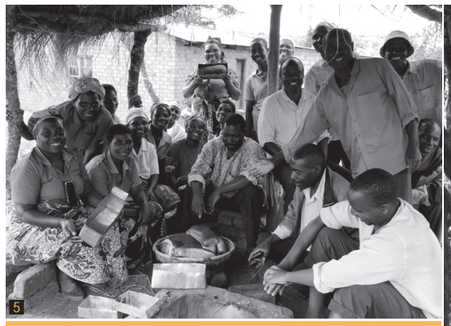
PROFILE

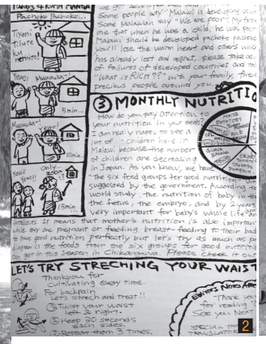
1990年生まれ、長野県出身。大学で国際協力学を専攻した後、山小屋やスキー場、温泉旅館での勤務を経て、2017年1月、協力隊員としてマラウイに赴任。19年1月に帰国。

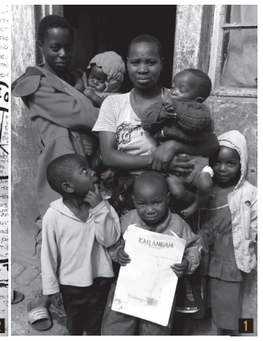
活動概要

マラウイ農業・灌漑・水開発省が設置するムジンバ県南部農業開発事務所チカンガワ農業普及所に配属され、農村部の住民を対象に主に以下の活動に従事。

●収入向上支援（ジャムやスナック、ドライフード、バナナペーパーなどの農産加工品生産の導入支援など）
●生活改善支援（燃焼効率ややけど防止などの効果がある改良かまどの紹介など）







1 活動地域の住民たち。手前の子どもが手にしているのは、徳竹さんが作成した「回覧板」
2 徳竹さんが作成した「回覧板」の英語のページ
3 「チカンガワをきれいなままに」というメッセージを書いた、ゴミ拾い用の土嚢
4 幹線道路の脇でゴミ拾いに取り組む子どもたち
5 徳竹さんの支援を受けてパンづくりに取り組んだ住民グループ

徳竹さんが配属されたのは、「チカンガワ」という地域を管轄する農業普及所。活動の柱は、住民グループが取り組む収入向上活動を支援することだ。20にのぼるグループを対象に、ニンニクのチップやパウダー、ポテトチップ、サツマイモクッキー、パンなどの製造技術の指導などに取り組んだ。

広範な活動対象を獲得する足がかりとなったのは、着任まもない時期に試みた「回覧板」だ。チカンガワは行政上、7つの地区に分けられており、それぞれに農業普及員が1人ずつ担当者として割り振られていた。徳竹さんは、住民グループへのあいさつ回りを始めるのに先立ち、「自己紹介」となるような通信を作成し、農業普及員たちに担当地区の住民グループに1部ずつ配布してもらった。住民たちがそれに目を通せば、徳竹さんがあいさつに訪れたときに親近感を持って迎えてくれるだろうと期待したのだ。

「回覧板」は、同じ内容のものを英語と現地語の2バージョン作成。それぞれA4判2ページで、簡易なバインダーに綴じた。グループ内で回覧されるよう、読んだ人が名前と日付を記載する欄も設置。主な内容は以下のとおりだ。

■自己紹介（自画像付き）
■マラウイの印象
■現地でその時期に手に入る農産物を6大栄養素に振り分けた表
■簡単なストレッチ体操の方法
■4コマ漫画（赴任して驚いたことをテーマにしたもの）

配布の約2週間後、ふたたび農業普及員たちに回収を依頼。バインダーにはポケットを付け、支援の要望などを書いた紙を入れてほしい旨を記載しておいたところ、「グループでパンづくりに取り組みたい」などと書きつけた紙を入れて返却してくれたグループもあった。そうして各グループのやる気や興味の対象を事前に知ることができたため、早々から多くのグループで具体的な支援に着手することができたのだった。

通勤時のゴミ拾い

徳竹さんが着任して意外に感じたのは、首都に比べ、チカンガワではゴミのポイ捨てが少ないことだった。チカンガワは市場の規模もまだ小さく、生ゴミ以外のゴミが多く出るような消費の状況になっていないのが原因のようだった。とは言え、ペットボトルなど土に返るのに時間がかかるものを含むゴミのポイ捨ては皆無ではなかった。

そうしたなかで徳竹さんはこう考えた。今のうちに地域の人々の「ゴミ」に対する意識を高めておくことで、いずれチカンガワの経済が発展し、「大量生産・大量消費」の時代がやってきても、地域の美しさが保たれるだろう――。徳竹さんの念頭にあったのは、「ゴミ」や「公害」が問題となった高度成長期の日本だ。先進国が犯してきた過ちを、任地の人々には「他山の石」として参考にしてほしいと考えたのだった。

そうして徳竹さんがゴミに関する啓発として取り組んだことのひとつは、前述の「回覧板」での情報提供だ。着任から半年ほど経ったころに第2弾の「回覧板」を配布したが、そのなかにはゴミに関する啓発目的の記事も盛り込んだ。プラスチックのゴミは、バナナの皮などの有機物のゴミとは異なり、土に返るまでに時間がかかり、その間、環境に悪影響を与える可能性があることなどを、イラストを使ってわかりやすく説明するものだ。

徳竹さんが取り組んだもうひとつの啓発活動は、「みずから町でゴミを拾うこと」である。家から配属先までの通勤路は地域の幹線道路で、脇にはゴミが多くポイ捨てされていた。徳竹さんは毎朝、ビニールのゴミ袋を手にゴミを拾いながら通勤した。子どもたちはすでに学校にいる時間帯であるため、出くわすのは大人ばかり。やがて「何をしているの？」と声をかけてくる人も出てきた。そうした反応を引き出すのが徳竹さんの狙いであり、すかさず「ゴミを拾っているのです。マラウイはきれいな国なので、それを保ち続けたいですから」と説明した。

地域の「風物詩」に

徳竹さんは通勤時のゴミ拾いを黙々と続けたが、一緒にゴミを拾おうとしてくれる大人は一向に現れなかった。そうして気持ちが折れそうになるなか、試しにゴミ拾いの方法を変えてみることにした。「休日に子どもたちと一緒にゴミ拾いをする」というものだ。

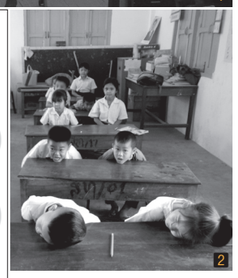
誘ったのは、常々、洗濯や洗いものを手伝ってもらったり、一緒に絵を描いて遊んだりしていた近所の子どもたちだ。「ゴミ拾いをしよう」と誘うと、娯楽が少ない環境にある彼らは、みんなで一緒にゴミ拾いをすることを「新しい遊び」のようにとらえたようで、興味津々で参加を引き受けてくれた。

そうして、毎週土曜日の「定期ゴミ拾い」がスタートしたのは、着任してから1年ほど経ったころだ。当初の主要メンバーは5、6人。時間は午前中の1時間程度で、ポイ捨ての多い幹線道路の脇や市場の中などを主な場とした。

重点を置いて拾うようにしたのは、プラスチックのゴミだ。プラスチックがすぐには土に返らないことを子どもたちに説明したうえで、「このゴミはプラスチックかな？」などと尋ねながら拾い進め、ゴミに対する子どもたちの理解を促した。

工夫したのは「ゴミ袋」。「チカンガワをきれいなままに」というスローガンを大きく書いた土嚢を使うことで、あたりの大人たちの関心を引くようにした。すると案の定、「よくやっているね」などと声をかけてくれる大人が現れるようになる。市場の店員などは、子どもたちが来るのを見越して、ゴミを集めておいてくれるようにもなったのだった。

任期の終盤になると、チカンガワに赴任してきた後輩隊員も、この定期ゴミ拾いを手伝ってくれるようになる。彼が自分の知り合いの子どもを誘ったことから、メンバーは総勢10人程度に増加。住民により強いインパクトを与える、地域の週末の「風物詩」となったのだった。C



1 他隊員とともに開いた、教員養成校の教員を対象とする算数教育のセミナーで、「授業規律」の指導方法を紹介する松井さん
2 松井さんは配属先の附属小学校の算数授業に入り、授業規律の指導方法を披露。写真は、「だらけた姿勢は?」との問いかけに児童たちが応えた場面
3 松井さんが作成した授業規律の要点を伝えるポスター
4 2と同じ授業で、「正しい姿勢は?」との問いかけに応える児童たち
5 配属先の学生が附属小学校で行った算数授業。松井さんが作成した教材が使われている

授業規律

松井 峻（まつい しゅん）さんの事例
（ラオス・小学校教育・2017年度1次隊）

CASE 4

松井さん基礎情報

PROFILE

1987年生まれ、三重県出身。大学卒業後、三重県の公立小学校に教員として勤務。2017年6月、協力隊員としてラオスに赴任（現職教員特別参加制度）。19年3月に帰国し、復職。

活動概要

サバナケット教員養成校（サバナケット県）に配属され、算数教育に関する主に以下の活動に従事。
●指導方法に関する授業の実施
●教員養成校の教員を対象とするセミナーの開催（他隊員との協働）

特集2 “美徳”を伝える活動

学校教員に不可欠な「授業規律」を身につけさせる技術を伝達

教員養成校に配属され、算数指導の授業を担当した松井さん。授業運営のかたわら、配属先の附属小学校で見られた「授業規律の低さ」という課題の解決にも取り組んだ。

教員養成校に配属された松井さん。活動の柱となったのは、算数指導法の授業をカウンターパートにあたる同僚教員（以下、CP）とともに行うことだ。任期の1年目は、配属先の1年生の授業を担当。2年目は、すでに教員として働いている人が受講するコースの授業を担当した。CPはほかの授業も担当していたことから、松井さんがメインで授業を行い、ラオス語による説明が難しい箇所などでCPにフォローしてもらうことを基本とした。

「算数指導法」というテーマの授業ではあったが、実際の授業内容は、小学校の算数を受講者自身にもう一度学び直してもらうもの。かけ算や分数がわからない学生もいたからだ。そうした授業を進めるなか、折々で「自分が教員となったときに、子どもにどう教えたら良いか」を伝えていった。

配属先の附属小学校では、週に1度、算数の研究授業会が開かれており、松井さんはそれを知識や技術を伝えるチャンネルのひとつとした。研究授業会の参加者は、配属先の算数分野担当の教員と、附属小学校の教員。いずれかの教員が児童を相手に算数の授業を実践し、その後、参加者で授業に関する事後検討を行うという流れがとられていた。松井さんは事後検討でアドバイスを提供。さらに、附属小学校の教員から「自分の授業を見て、アドバイスがほしい」と依頼され、研究授業会がある日以外の日にそれを引き受けることもあった。

「授業規律」の課題の発見

松井さんは附属小学校の授業を見学するなかで、ある課題に気づいた。「姿勢が悪く、教員の話を聞けていない」など、「授業規律」に問題のある児童がいるにもかかわらず、教員がそうした児童を放置していることだ。授業規律が身についていなければ、教員がどれだけ指導技術を高めたところで、児童の理解の促進にはつながらない。

松井さんは、見学した附属小学校の授業で教員の話を聞かない子がいた際、その教員に「あの子は先生の話を聞いていませんね」と尋ねたりもした。返ってくるのは、「あの子は全然だめ」など、あきらめている様子の答えばかりだった。

松井さん自身、日本で小学校教員として働き始めた当初は、クラスの児童に授業規律を身につけさせるのに難儀した。先輩教員に助言を仰いだり、ノウハウを紹介する本を読んだりしながら、長い時間をかけて次のような有効なやり方を見つけ出していった。

「姿勢よく座って話を聞く」といった規律を守っていたら、具体的に行動をほめる。すると、それを真似する子が出てくるので、今度はその子をほめる。それを繰り返していくと、教室全体に「規律がとれている」と感じられる瞬間が訪れる。それがすぐ崩れることもあるが、そうした瞬間が何度も訪れるうちに、やがて規律のとれた状態が持続するようになる——。

以上のようなプロセスを実現することは、教員が持たなければならない「技術」のひとつ。松井さんはそれを配属先や附属小学校の教員たちに伝えたいと思うようになったが、任期の前半は配属先での授業をしっかり行うことに力を注ぐべきだと考え、授業規律の働きかけはしばらく差し控えることにした。

啓発ポスターを作成

松井さんはその後、附属小学校で通常の授業や研究授業を見学する際は、ラオスの子どもたちにどのような授業規律をつけさせるべきかを意識して探るようになった。そうしてピックアップしたのは、次の例を含む12項目だ。

■正しい姿勢で座る。
■私語を慎み、教員の話をきちんと聞く。
■飲食をしない。
■机の上や引き出しの中の物を整頓する。
■居眠りをしない。
■他の児童の発表をきちんと聞く。
■トイレは休憩時間に済ます。

これらの規律を児童に身につけさせることの重要性やその方法について、現地の関係者に伝えるようになったのは、任期の終盤になってからだ。その方法のひとつは、附属小学校の授業に入り、児童に授業規律を身につけさせる方法を実践してみせるというもの。松井さんがフォローしながら、授業規律を身につけさせる方法を現地の教員に実践してもらうこともあった。

もうひとつの方法は、「啓発ポスター」の作成だ。ラオスの子どもたちが身につけるべき授業規律としてピックアップした12項目を、イラストによって児童にもわかりやすいように紹介するものである。これは附属小学校で「有意義だ」と受け止められ、すべての教室に貼られることとなった。

任期の最終盤、松井さんはほかの小学校教育隊員たちとともに、それぞれが配属されている教員養成校の教員を対象とする算数指導のセミナーを開催した。そのなかでも、松井さんは算数指導の技術に関する講習を行うだけでなく、授業規律に関するワークショップも行った。受講者の教員たちに「良い姿勢」と「悪い姿勢」を体験してもらうなど、「授業規律」への意識の向上を引き出すことを主眼とする内容のものだ。

児童に授業規律を身につけさせることは、そのノウハウを知れば実現できるものではない。児童に声かけをし、それに対する児童の反応をキャッチし、次の声かけの仕方を工夫する。そうしたプロセスの積み重ねで習得される、言わば「職人技」とも言うべき技術だからだ。

松井さんが悔やむのは、附属小学校の教員などがそうしたプロセスに挑戦する場に寄り添い、技術の習得を後押しするだけの時間がなかったこと。そうしたなかで頼みの綱は、附属小学校の各教室に貼られることとなったポスターだ。それらを日々、目にしながら、同校の教員たちが児童に授業規律を身につけさせる技術を試行錯誤を経て身につければ、言わばモデル校として、他校に波及させていく拠点となるだろうというのが、松井さんの期待だ。

引き継げる活動ができていると思い込み 同僚との話し合いを疎かにしてしまった

文＝天野（あまの）さちさん（ホンジュラス・助産師・2016年度4次隊）

配属から1年経った頃、村のコミュニティへの出張に呼ばれることが増えた。9つあるコミュニティに対し、医師・看護師・保健推進員で構成される各グループが配属先にはある。家々の住所はなく、住民リストも完全ではないが、「〇〇辺りに住む☆☆さんの子どもは●人いて、名前は……」と各担当は個人的な知り合いのように住民のことを把握していた。

当時の私は、住民を対象にした健康教育のミニ講義をいかに同僚に引き継いでもらうかを意識していた。同僚たちも講義はしていたが、識字率が低い年齢層に向けた講義で文字だけの資料を使用するなど、内容や教材が現地の状況に適していなかった。そこで自作した絵や図などの教材を使って私がテーマと流れを決め、できる部分は同僚たちが実施し、そうでない部分は彼らに私のスペイン語の補助をお願いするという形で、2人でひとつの講義をしていた。一緒に講義をした成功体験が重なれば、離任後も彼らだけで講義を続けられる、と考えていた。

そんな時期、ある同僚に「テーマは好きに決めていいよ」と言われハッとした。それまでは何とも思わず、むしろ私は信頼されているとさえ思っていたそのひと言で「彼らは私がなぜそのテーマを選んでいるのか理解していない」と気付かされたためだ。そのコミュニティの疾病割合や人々の健康意識などをデータから読んだり、担当に聞き取り調査をしたり、保健所に診察に訪れる患者に接したりしている中から、私がアセスメント*していることを彼らは知らないのだ、と。私自身それらを半ば無意識のうちにひとりで実行していて、彼らと共有する必要があると思っていなかったことにも気付いた。

その場で「私が決めるのではなくて、そのコミュニティの特徴を考えて、あなたがその地域の人たちにどうなってほしくて、そのためにはどういうテーマがいいか考えてほしい」と同僚に提案したが、彼女は「私と行くのが嫌だからそんな面倒なことを私にだけ言うの？」と怒り、出張同行を断られてしまった。

この一件から、まず出張に呼ばれたら、そのコミュニティの特徴を担当の同僚と話し合い、私がアセスメントしたことをすり合わせることから始めるようにしたところ、終盤には自分で考えたテーマで講義を行う同僚も現れた。

住民を対象にした健康教育のミニ講義を行う天野さん。同僚のAさんとは特に良い関係を築くことができ、天野さんはAさんにスペイン語の補助を依頼し、Aさんは「こういうテーマで講義をするときの教材は何がよいか」と質問。互いの意見を話し合い納得したうえでAさんが講義を実施し、最終的にはAさんに講義を任せられる状態になった

PROFILE

福岡県出身。2011年から助産師として病棟勤務。17年3月、協力隊に参加。ホンジュラスの山村にて住民に予防啓発や健康教育などを行い、前任者からのプロジェクトである母子手帳の試験運用を開始。19年3月帰国。現在、進学に向けて勉強中。

活動概要

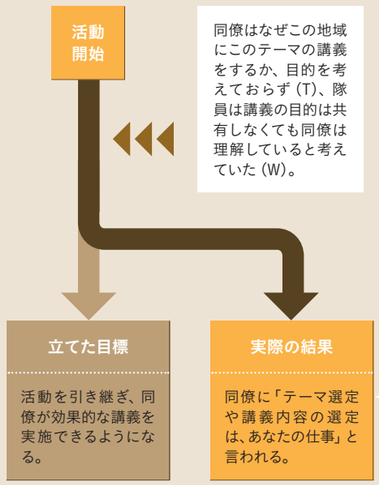
ホンジュラスの山村部の人々の健康意識改革のため、以下の活動を行う。

- ●思春期・妊婦・母親に対し若年妊娠や多産予防啓発、産前指導
- ●地域住民と医療者をつなぐ健康ボランティアに対しても同内容の講義
- ●同僚に対し、講義の目的や内容・方法の決定プロセスの指導　など

＊アセスメント…主観的な情報と客観的な情報を総合して（看護）問題を導き出す過程。

“失敗”から学ぶ #174

事例整理



【本事例の状況（SWOT分析）】

	促進要因	阻害要因
内部	【隊員の強み（S）】情報を分析して現地の課題を見つけ、改善方法を提示するスキルがある。	【隊員の弱み（W）】アセスメント過程を共有する必要があるとすら考えていなかった。
外部	【環境の良い面（O）】保健省からの実施ノルマがあるため、講義実施回数はある程度確保されている。	【環境の悪い面（T）】保健省からの実施ノルマを達成するため、同僚は講義の意味を考えずに実施している。

隊員自身の振り返り

失敗の原因は、同僚に講義の目的や、地域住民を主語にしたときの目標は何かについて、私が彼らの意見を聞こうともしていなかったことだと考えます。それに気づいたのち彼らと話したところ、彼らにとって講義をする理由は「保健省がやれと言うから。やらないで契約解除されるのを防ぐため」であり、「住民にこうなってほしい」という目標を考える次元ではなかったと知りました。カウンターパートや配属先の保健所長とは私の活動目標や要請内容、彼らの要望などを共有していましたが、実際に一緒に仕事をする看護師や保健推進員とも早めにそれらを共有しておけばよかったと思います。

他隊員の分析

待つことと動くことのバランス

私も2年を通して継続的な活動を試み、何度も失敗し、悩みました。問題意識が持てないことは続かない、これは日本人の私たちも同じだと思います。現地の人が行動するのを待っていると時間がかかり、焦ることも多かったです。しかし、いかに彼らに問題意識を持ってもらえるかがキーだと気づき、彼らからの問題提示を待つようにしました。また、現地の人の本気度を測るため、お金を使う場面では少額ですが彼ら自身で払えるかを指標にしました。これにより、継続性のある同僚やグループを効率的に振り分けられ、活動がうまく進むようになりました。

文＝協力隊経験者
- ● アフリカ・エイズ対策・2015年度派遣
- ● 取り組んだ活動

病院内のマネージメント強化（5S-KAIZEN）と、地域におけるHIV陽性者グループの石けんづくりによる収入向上、及び、ユースグループとHIV/エイズの予防啓発活動を行った。

参加意識を芽生えさせる工夫を

私も隊員時代、自分が活動の主体となり過ぎ、同僚の参加意識が芽生えなかった経験があります。ポイントは「どこで同僚を巻き込むか」と「その巻き込み方」。何回か隊員主体で活動を行い、同僚から活動への理解を得たら、次の活動を考える際、仮に改善点がわかっていても、「もっと活動を良くしたい。一緒に考えてくれないか」と“わからないフリ”をして同僚に相談するのもひとつの手です。頼られることで、同僚に参加意識が芽生えます。そして成功体験は彼らの自信や、「活動を続けたい・より良くしたい」という意欲につながっていくと思います。

文＝協力隊経験者
- ● アジア・青少年活動・2015年度派遣
- ● 取り組んだ活動

県の学童施設にて、子どもたちを対象に日本語指導や歌の指導を行った。また、施設職員のスキルアップを目指し、同時期に派遣されていた他の隊員と協働し、各種教育研修を企画し、実施した。

派遣人数は少ないものの
いぶし銀の活躍をする
職種の事例をピックアップ

希少職種図鑑

#B331

都市計画

派遣中 ▶ 2人
累　　計 ▶ 204人
分　　類 ▶ 公共・公益事業
活動例 ▶ 未開発地域の開発計画策定に向けた助言　など
類似職種 ▶ 土木、行政サービス　など

※人数は、2019年7月31日現在。

活動地の急斜面に立つバラック群。斜面の特性を生かした緑地計画に谷津さんの提案の一部が受け入れられた。「緑地の管理運営は地域の協力が欠かせないので合法住宅地と非合法住宅地の住民の交流がどう実現されるか楽しみ」と谷津さんは話す

PROFILE

1947年生まれ、宮城県出身。70年東北工業大学建築学科卒業、設計事務所勤務を経て71年から同大学勤務。99年から2015年3月まで同大学工学部建築学科教授。その間同学科建築学科長、株式会社地域空間研究所代表取締役を務める。15年3月、同大学退職。16年1月、協力隊に参加。18年1月帰国。現在、東北工業大学名誉教授。

活動概要

首都ボゴタ市の南部にある貧困層住居地域が抱える課題を改善するため、以下の活動を行う。

- ●住居地域の安全性確保のための道路計画と防災計画への助言
- ●自然環境を取り入れた住環境をつくるための計画（公園計画・緑地計画）の提案・実施
- ●地方から都市部へ流入する貧困層への住宅確保のための計画立案、工事監理の提案　など

話

谷津憲司（やつけんじ）さん
（SV／コロンビア・2015年度3次隊）

Q メインの活動は？

活動地域はいわゆるスラム地帯で、合法、違法の住宅地が混在し、車も入れないような急斜面に非耐久資材のベニヤやトタン板などでつくられたバラックが乱立している。雨が降れば、土砂崩れ、鉄砲水が住宅を襲うこともある。ゴミが散乱し、野放しの犬の群れが餌をあさる光景も珍しくない。このような地域の課題を解決するための計画立案、工事監理が主な業務だった。

ゴミ処理システムや広域的な排水処理システムの確立が根本的な解決につながるが、対処的な計画が多く、長期的な提案はなかなか受け入れられない。私の提案した、将来を見越し、環境に配慮した公園計画に予算がつくことはなかった。プロジェクトの1割も実現しないのはどの国も同じだ。プロジェクトのうち途中参加した公園計画だけが帰国前に竣工。合法住宅地と非合法住宅地の境界にある公園で、実施にあたっては住民のボランティアが活躍した。

Q 活動の最大の困難は？

私は、配属先で部署が2度、カウンターパートが雇用契約切れで3度変わった。[*1]地域計画は長期的な展望での立案が不可欠だが、1年ごとに契約を更新する現地の職員に、改革や提案を検討する精神的余裕はなく、計画や技術の継承はほとんど望めない状態だった。

Q どう対応しましたか？

総合的な地域計画の重要性を職員も理解しているが、末端組織のレベルでそれを実現するのは難しい。かといって、無視してもいいと言うことではない。私は、現地調査を元に、現状分析のデータを3次元CAD[*2]や画像編集ソフトを使いできるだけ視覚的に表現して職員に配布し、長期的、広域的な視点で対象地域を見てもらえるように努めた。また、現地の人は短・中・長期的な展望に加え、日常のスケジュール管理も不十分なので、その重要性を伝えるため、現地では手に入りにくい日本のスケジュール手帳を全員に配布した。

Q 同職種の後輩隊員にメッセージをお願いします。

これまで培ってきた自分の技術や能力が現地で十分に生かせることは稀だと思います。現地の要望に対応できる柔軟な発想が必要ですが、そもそも要望がない場合もあります。そんなときは広い意味での文化交流と考え、自由に活動したほうがいいでしょう。私は配属先で大学を出たばかりの青年に、週2回昼休みに日本語を教えていましたが、彼は日本政府奨学金留学生として今年の4月に来日し、東京工業大学の大学院で建築構造の研究をしています。こんなうれしい話が聞けるのも、自分の専門にこだわらない活動があったからだと思っています。C

＊1 地域計画…地域空間を整備することによって、住民の生活の向上をはかる総合的な計画。　＊2 3次元CAD…コンピュータを用いた3次元の設計をするための支援システム。

#C108

土壌肥料

派遣中 ▶ 2人
累　　計 ▶ 148人
分　　類 ▶ 農林水産
活動例 ▶ 大学での土壌分析学の指導支援、土壌改善法の指導　など
類似職種 ▶ 病虫害対策、野菜栽培

※人数は、2019年7月31日現在。

さまざまな方法で管理・栽培をしたカリフラワーの根を見せ、根こぶ病に効果のある農薬や石灰を用いた土壌改良について伝える原田さん（右下の写真が試した方法とその結果の根の状態）。原田さんは、3地区、30人程度の農家を重点対象農家として、1～2週間に一度、全戸を巡回し、野菜栽培の指導を実施した

PROFILE

1980年生まれ、広島県出身。地方公務員の普及指導員[*1]として施設野菜指導、研究員として3.11に伴う放射能性物質に関する調査・研究、たい肥や緑肥を用いた水稲・野菜の減肥栽培方法の検討を行う。退職し、2016年6月、土壌肥料隊員として、ネパールに派遣。18年6月に帰国。現在は、広島県の実家の「ビジネス旅館はらだ（http://harada-bijinesu.sakura.ne.jp/）」にスタッフとして勤務中。

活動概要

カトマンズ都市近郊の野菜栽培農家に対して以下の活動を行う。

- ●セル苗育苗を中心としたトマト栽培支援
- ●トマト後作もしくはトマトに代わる換金作物の提案（リーフレタス、キュウリなど）
- ●病害虫防除指導（病害虫別農薬対応リーフレット作成、カリフラワー根こぶ病抑制対策試験圃の設置）

話

原田浩司（はらだこうじ）さん
（ネパール・2016年度1次隊）

Q メインの活動は？

国の研究室が実施する土壌分析を実施したが、作物別施肥基準値の曖昧さ、土壌分析実施時に出る廃液の不適切な処理問題に加え、生産現場では大きくバランスが崩れた土壌は少ないなどの理由から、土壌肥料の面のみではなく、「今栽培ができている作物（雨[*2]よけトマト）の収量向上を目指す」活動に重点を置いた。導入が始まりかけていたセルトレイを普及させるため、農家と一緒に都市部まで赴き、一括購入で安く仕入れ、サンプルを配布することで、篤農家[*4]を中心にセルトレイ育苗の有用性が口コミで広がった。また、不適切な農薬使用方法が顕著だったため、現地業務費を利用して、病害虫別の農薬適用表を作成・配布した。

Q 活動の最大の困難は？

トマト後作[*5]のカリフラワー栽培における根こぶ病[*6]及びトマトの萎れ症状の発生への対応。国の病害虫対策に関する体制が不十分（研究所と現場の乖離[かいり]など）で、明確な対策を立てることができなかった。特にトマトの長期栽培化を目指し、斜め誘引[*7]を指導したが、萎れ症状が顕著に増加したことで、農家の信頼を失い、当技術の普及を断念。いずれも、配属先スタッフとのコミュニケーション不足による、「この病害対策が急務である」ことを共有できなかったのが最大の失敗だと考えている。

Q どう乗り越えましたか？

根こぶ病に関しては、効果のある農薬・土壌pH改善（石灰の施用）などを指導したが、当初、実施する農家はほぼ皆無。任期終盤に現地を支援するNGOと出会ったことで課題を共有化でき、当病害に対する「動き」が現れ始めた。それにより配属先スタッフのひとりが興味を持ち、効果のある農薬、石灰、微生物資材を用いた試験圃[*8]を設置できた。試験圃の設置が初めての状況で、問題点はたびたび浮上したが、石灰などによる効果を「目で見てわかる結果」として農家に提示はできた。

Q 同職種の後輩隊員にメッセージをお願いします。

派遣当初は、言語の問題もあり「役に立たない」ので「仕事も与えられない」状況が続くことがあるかもしれません。私は、土壌肥料分野にのみ固執するのではなく、自分の得意技（トマト栽培技術）を「大げさなくらい」アピールしました（配属先で実施する講習会において、絵を多用したトマト栽培資料をゲリラ的に張り出すなど）。その結果、面白がって講習会の時間を割いてくれるようになり、農家に認知され、圃場に招いてくれるようになりました。その後は、徹底的に巡回をして農家の信頼を得たことで、新技術導入を図れるようになり、現地に役立つ活動ができるようになったと思います。C

＊1 普及指導員…農林水産省が実施する国家資格で、農業従事者に直接農業技術の指導をしたり、経営の支援をしたりなどする人。　＊2 雨よけトマト…ハウスなど雨の当たらない場所で栽培するトマト。
＊3 セルトレイ…小さなポットが連結している苗を育てるためのパネル。　＊4 篤農家…熱心な農家。　＊5 後作…後から植え付ける作物。　＊6 根こぶ病…根こぶ菌によって根にこぶができ、植物が枯れてしまう病気。
＊7 斜め誘引…植物の茎が斜めにはうように支柱やロープに紐などで結ぶこと。　＊8 試験圃…農産物を試験的に育てる場所。

Vol.170

before ▸ after 人生を変えた2年間

before
印刷機メーカー 社員

↓

after
ハラル食品販売店 経営者

広島県尾道市の因島にある「ケラナ・アジア・アンド・ハラル・マーケット」。ケラナはインドネシア語で「自由に生きる」という意味。東広島の店名「アリ」は松本さんのイスラム名。東広島店は、インドネシアやバングラデシュ、パキスタン、アフガニスタンなどの留学生向けの食材、因島店はフィリピンやタイの人たちに向けた食材を揃えている。因島の店では、1週間分の食材をまとめて買う人や、隣の島から来て1カ月分まとめて購入する人もいる

故郷の味が励ましてくれる

インドネシア・陸上競技・2013年度1次隊

松本（まつもと） 圭太（けいた）さん

12年間、陸上競技の選手として走り続けた。その次のステップに選んだのが協力隊だ。インドネシアで陸上のコーチとして活動し、帰国後は広島県でインドネシア語の通訳として働いた。そのとき、日本在住のイスラム教徒が食材を手に入れる苦労を知り、それをきっかけにハラル食材販売店のオープンを決意。現在、2店舗を経営している。

「ゴムの時間」の中で生きる

市民ランナーだった父の影響もあり、幼い頃から走ることが好きだった松本さんは、高校、大学の陸上部で長距離の選手として活躍し、卒業後は陸上部のある企業に就職。ロンドン五輪の陸上競技日本代表選手を目指し、陸上を中心に生活していた。競技生活を続ける難しさも知っていた松本さんは、結果にかかわらずそこで引退と決めていた。

2012年春に引退し、しばらくは走る以外の好きなことをしようと、世界一周旅行の計画を立てていた。いろいろなブログを見ていたとき、協力隊に陸上競技という活動があることを知る。海外で、自分が持つ技術が人の役に立つのなら行こうと考え、応募。合格し、インドネシアへの派遣が決まった。

陸上競技のコーチとして、スポーツ選抜された高校生に対して、競技力向上のための指導をすることになった松本さん。選手とコーチの関係は緊張感があるものだと思って活動を始めたが、友人のように接してくる選手たちに戸惑うことになる。私語が多く、メリハリがない練習。改善したかったが、日本の方法を押し付けるのも正しいとは思えなかった。松本さんは「ここは集中。それ以外は話してOK」という風に、緩急ある良いバランスを模索。また練習日誌を導入し、競技に適した練習方法などの資料を作成して配布することで、選手の競技力向上を促した。

活動で人との距離感に悩んだものの、生活では気がおけない人付き合いを魅力に感じていた。活動後に同僚や生徒が彼らの家族との夕飯に誘ってくれ、休日に遠出をしたときは現地で出会った人が家に泊めてくれる。何よりも現地で「ゴムの時間」と呼ばれる、のんびりした時間感覚は自分に合っていた。

「約束の時間はあってないようなもの。最初は困りましたが、徐々に慣れ、あくせくしていない暮らし方が私にはしっくりきました」

任期終了後もこの国で暮らそう――その

1986 茨城県出身。

2009 **3月、大学卒業後、株式会社小森コーポレーション入社。**

2013 **8月、青年海外協力隊に参加①**
インドネシアの南スラウェシ州マカッサルにある青年スポーツ局に配属され、陸上選手に選抜された高校生の競技力向上のため、競技指導やトレーニング計画の作成、練習結果のデータ化と分析などに取り組んだ。

選択の理由
会社の陸上部にケニア出身の選手がいて、彼から裸足で走るなど練習環境が整わない状況にいたことを聞いた松本さんは、アフリカに靴を送る活動に参加し、靴を送っていた。ほかにも人の役に立つことができないかと考えていたところ協力隊を知り、応募。

協力隊に参加

2015 2月、帰国し、入院。翌年3月、退院。

2017 4月、公益財団法人国際人材育成機構入社。10月退社。

2018 **10月、ハラルショップアリをオープン②**
5月、ケラナ・アジア・アンド・ハラル・マーケットをオープン。

選択の理由
インドネシア人でイスラム教徒の妻が、日本の店で食材を探すことに困っている姿を見て、その苦労を少しでも和らげたいと、ハラル食品販売店を開業する。

店を開業

Halal Shop ALI
住　所：広島県東広島市西条朝日町7−7
営業時間：11:00〜20:00（休：月・火）
ＵＲＬ：https://www.facebook.com/halalshopali

Kerala Asian and Halal Market
住　所：広島県尾道市因島重井町5221−7
営業時間：11:00〜20:00（休：月〜木）

インドネシアで陸上の指導をする松本さん。担当した選手には競う相手が少なかったため、共に走るなど一緒に練習をし、勝負の駆け引きを感じてもらった。それが奏功し、全国大会の800メートル走で男子が2位、女子が3位になった

ための仕事として、現地で店を構える計画を立てた。当時のメモには「おにぎりスタンド」「洗車店」などと書かれていたそうだ。

任期を6カ月残したある日、長引いた風邪が治らず、首都の病院で検査。その日に日本に帰され、即手術となる。その後1年入院し、日常生活に戻るにはさらに1年かかった。

外国人が日本でホッとできる場

しばらく通院が必要なため、日本でインドネシアとかかわれる仕事を探したところ、外国人技能実習生の通訳の仕事を見つけ、就職。広島県で実習生に仕事内容の説明や資格を取るための講習で通訳などをしていた。そのとき、イスラム教徒のインドネシア人が食材を自由に買えず、困っていることを知る。

「日本では食材の原材料名は基本的に日本語表記だけ。食事の規制事項があるイスラム教徒で、日本語を読むことが困難だと何を買っていいのかわからない。彼らが買い物をしやすい店があればいいと思いました」

インドネシアにいたとき、松本さんの楽しみのひとつは首都で買った冷凍保存の納豆を食べることだった。故郷の味は、心を慰め、生活を豊かにしてくれる。その思いもあり、ハラル食材販売店の開業を決めた。

最初に出店したのは広島大学があり、留学生が多い、東広島市だ。商品の仕入れには「バランスが大事」だと松本さんは言う。

「最初はお客様の要望に応えて仕入れをしていましたが、在庫を抱えるだけでした。協力隊時代に日本の練習法と現地の練習法の良いバランスを探したように、お客様と店にとって良いバランスを見つけると店がうまくまわるようになっていきました」

商品はインターネット上でも購入でき、注文から瀬戸内海にある因島（いんのしま）周辺の住所が多いことに気づいた。因島には造船関連会社があり、多くの外国人が働いている。そこで因島に2つある造船関連会社の中間点、しまなみ海道沿いに2号店を出店した。

店を始めて2年、経営が軌道に乗ってきたので「好きなことも取り入れたい」と考えている。現在も店に机と椅子を置き、客同士が交流する空間を設けているが、因島店を少し拡張してインドネシアのカレーを提供したいそうだ。しまなみ海道沿いの店でカレーを提供することでサイクリストなどの観光客が来店し、「外国人と日本人が出会う場所」となることも狙っている。インドネシアのように「人と心地よくつながれる」、そんな場をつくるプランを練っているところだ。C

理想 現実

帰国後の と を語り合う

OB・OG 匿名 座談会

第⑨回 ものづくり分野 篇

座談会参加者

A さん（男性）

【派遣前】
家具職人
【協力隊】
▶退職参加
▶木工・アジア・2011年度派遣
▶職業訓練校で木工の指導などに従事
【現在】
個人事業主として、家具の製作・販売や海外の工芸品の輸入・販売などを行う

B さん（女性）

【派遣前】
和裁士
【協力隊】
▶退職参加
▶手工芸・アフリカ・2014年度派遣
▶職業訓練校で裁縫の指導などに従事
【現在】
日本の着物総合加工会社がベトナムに置く縫製工場に、技術アドバイザーとして勤務

C さん（女性）

【派遣前】
グラフィックデザイナー・アートディレクター
【協力隊】
▶退職参加
▶デザイン・アジア・2014年度派遣
▶手工芸品生産者を対象に、地域ブランド立ち上げなどに従事
【現在】
個人事業主として、アートディレクションやグラフィックデザインなどを行う

帰国後のあゆみ

A 私は専門学校でインテリアデザインと木工を学んだ後、協力隊に参加するまで家具職人として家具メーカーに勤めていました。協力隊は長期と短期で1回ずつ、同じ国に派遣されています。長期では職業訓練校で木工の指導に携わり、短期では農家の方々への手工芸品づくりの指導に携わりました。その後、「いずれは家具職人として独立したい」という学生時代からの思いを持ち続けていたのですが、まだその覚悟が決まらなかったので、まずは成長産業のIT企業に就職しました。そこで丸2年勤めた後、ようやく覚悟を決め、家具の製作・販売や海外の工芸品の輸入・販売をする事業を立ち上げ、現在に至ります。

B 派遣前は着物総合加工を行う会社の和[*1]裁士として、海外の縫製工場で仕立てられた着物の検品や直しをする仕事に携わっていました。協力隊時代は職業訓練校で裁縫の授業を担当しています。私は「和裁技能士」という和裁士の国家資格を持っていますので、帰国後はその専門性を生かしつつ、海外で働きたいということで、ふたたび着物総合加工の会社に就職し、そこがベトナムに置く縫製工場で技術的なアドバイスをする仕事に就きました。

C 派遣前は広告制作会社でグラフィックデザイナーやアートディレクターとして働いていました。協力隊では、手工芸品の製造・販売を行う中小零細企業を対象に、地域ブランドの立ち上げの支援などに携わりました。帰国後は、グラフィックデザインやフェアトレード商品の開発などをフリーランスで請け負うかたわら、大学で「ものづくりと地域資源の関係性」について勉強しています。昨年の秋に「研究生」という立場で学部に入り、来年度から大学院で学ぶ予定です。

手仕事のブラックボックス化

B 私は協力隊経験を通じて、日本の「手仕事」の質の高さをあらためて確認することができました。派遣国には多様な柄の伝統布があるのですが、好きな柄のものを選んで買い、それをテーラーに持ち込んで服に仕立ててもらうのが一般的です。そのプロのテーラーでさえ、日本人の感覚からすると、縫製があまり上手ではないのです。そのため、配属校の授業では基礎をしっかり教えようと努めはしたのですが、派遣国では消費者が求める縫製の質自体が低いので、意味があるのか、葛藤がありました。

C 日本の手仕事の質ということで言えば、たとえば大島紬[*3]などは気が遠くなるほど工程が複雑で、細かな手仕事をいくつも積み重ねる。そうして手間をかけてつくられるものだからこそ、親から子へと受け継ぎながら、長い間使われ、結果として環境への負荷が小さいものづくりにもなっているのだと思います。

A 私も「アジアの人々の手仕事は、日本人のレベルには及ばないだろう」という漠然としたイメージを持って赴任したのですが、派遣国の山奥には、日本の工芸品のように精巧なカゴを編む民族がいました。興味深かったのは、「上下・左右の非対称」など、「不完全さ」を受け入れ、それを残したデザインとなっていたことです。というのも、美に対するそうした感覚は、日本人こそ手仕事のなかで大切にし、研ぎすませてきたものだからです。たとえば、千利休の時代、節がある竹の茶杓[*4]や、片側に欠けがある器などに「美」が見出されていた。日本のインテリア業界は欧米のデザインが主流となっているのですが、そこでは「対称性」や「完全性」に美が見出されています。そういう感覚に染まっていた私にとって、あのカゴとの出会いは、あらためて日本の手仕事が持つ価値に気づかせてくれるものでした。

C 問題は、お話に出たような日本の手仕事にあるアイデンティティーが、日本国内で省みられなくなってきていることではないでしょうか。「安くて、手入れが簡単」という「経済性」の価値基準によって、機械で画一的に大量生産されたものばかりに需要が移っている。その原因は「手仕事のブラックボックス化」にあるのではないかと、私は協力隊時代に考えるようになりました。私の派遣国では、バイク店の軒先で店員がバイクをいじっている光景などを、あちこちで目にすることができました。今の日本では、一般の人がそうした手作業の現場を見る機会がほとんどない。そうすると、手作業にどれだけの手間がかかっているかがイメージできないから、そこにある価値なども省みなくなってしまう。言わば、「ものづくりに対するリテラシーの低下」とも言うべき事態が起こっているのではないか。ある美大の先生は、「『手仕事』についての子どもたちの無知が進んでおり、『波縫い』すらできないままテキスタイルデザイン科に来る学生がいて、困っている」とおっしゃっていました。

B 「手仕事のブラックボックス化」は、着物にもまさしく当てはまると思います。一般に「着物は高すぎる」というイメージが持たれているかと思いますが、全工程を知れば、「その値段でも安すぎる」と感じるはずです。さきほどお話に出た大島紬などは、行政の補助金によってなんとか生産者の生活が成り立っているような状態なのです。

「ものづくり」の啓発活動

C 日本人の「ものづくりに対するリテラシー」を高めるためには、「ブラックボックス化」してしまっている手仕事の様子を広く伝えていく「啓発活動」が必要ではないかと、私は考えています。

A 私は現在、ギャラリーなどから依頼を受け、子どもたちに手仕事について知ってもらうことを目的としたワークショップを開く仕事もしています。たとえば、十数種類の日本の木材を持ち込み、触ったり、匂いを嗅いだり、削ったりしてそれぞれの特徴を感じてもらったうえで、実際に「箸づくり」などの手仕事を体験してもらうようなワークショップです。

C 日本の木材を紹介しているとのことですが、ものづくりでは「地産地消」が大切であるという点は、私が協力隊時代に感じたことのひとつでした。派遣国の農村部では、周囲で採れたニッパヤシや竹で家をつくっている方々がいたのですが、彼らに話をうかがうと、「自然の恵みをいただいている」という「農業」に近い感覚でものづくりを捉えており、それによっておのずと環境の持続可能性への配慮ができている。私が現在大学で勉強しているのも、「ものづくりにおける地産地消」に関することなので、いずれ、このテーマに関して体系だった話ができるようになりたいと考えています。

A 日本の建築業界は、かつて東南アジアで採れるラワン[*5]の合板を盛んに建築材として使っていました。安く手に入ったからです。ところが、産地の森林が急速に失われていったため、最近になってようやく、日本の針葉樹を建築材に使おうという動きになってきており、私もそうした歴史を踏まえて、家具づくりでは国産材を使うことにこだわっています。

B ものづくりに関する「啓発」として私が取り組みたいと思っているのは、派遣国の方々が使う伝統布を日本で紹介することです。日本では目にする機会が少ないタイプのデザインであるため、ものづくりの多様なあり方を知ってもらうきっかけになるだろうとの考えからです。帰国の際に何枚も持ち帰ってきたので、それらを使って着物を仕立て、販売するなどできればと思っているのですが、本業が忙しく、帰国して2年経った今でも、実現できていないのが残念です。

C 私の派遣国にも、固有の伝統デザインでつくられた手工芸品がありました。しかし、さきほどAさんから「日本のインテリア業界は欧米のデザインが主流」というお話がありましたが、日本ではプロダクトデザイナーもやはり欧米のデザインを教育されるため、仕事のなかでアジアやアフリカのデザインからヒントを得ようという発想は持ちづらい状況です。

A 私が家具づくりと並行して海外の手工芸品の輸入・販売を行っているのも、Bさんと同じ考えに立ってのことです。ゆくゆくは日本で古民家を手に入れ、子どもたちを集めて木工を体験してもらうワークショップなどを開くことも計画しています。そこには、日本の伝統的な木工技術でつくった家具のほか、アジアや欧米など各国の手工芸品なども配置し、文化の多様性を感じてもらえるようにしたいとも考えています。

C 現在、手仕事でつくられた日本の伝統工芸を集めた見本市が国内各地で開かれるようになっています。ものづくりに関する活動に取り組んだ協力隊経験者が10人くらいでチームを組み、ものづくりに関する啓発を目的としたイベントを開くというのもおもしろそうですね。

C

＊1 着物総合加工…着物の仕立てや直し、洗い、しみ抜きなど。
＊2 和裁士…着物の仕立てや直しをする専門職。
＊3 大島紬（おおしまつむぎ）…鹿児島県の奄美群島で伝統工芸としてつくられてきた絹織物。泥田での染色（泥染め）を特徴とする。
＊4 茶杓（ちゃしゃく）…抹茶を容器から茶碗に移し入れるための匙（さじ）。
＊5 ラワン…フタバガキ科の広葉樹の総称。

JICA海外協力隊的プチテクガイド

簡単＆便利！ 活動・生活のパワーアップに役立つ

第99回

生活に役立つ技

自分で髪の毛を切ってみよう①

ナビゲーター＝斉藤達也さん
（インドネシア・美容師・2014年度3次隊）
プライベートサロン「LORONG」「305」「BUKA BUKU」オーナー美容師

目と眉毛の間まで前髪をカット。そのまま左写真のように流すこともできるが、工程15の矢印部分を少し切ると、髪は短い方から長い方に流れるので、きれいな斜めラインができる。

伸びてしまって斜めに流している前髪。ここから5センチほどカットする。

前髪をカットする

前髪を切る工程は、大まかに2つ。髪の毛を分ける「ブロッキング」と「カット」です。自分で分け目をつくるのは難しいので、元の前髪の分け目を見つけると良いでしょう。髪を濡らさないこと、「切り足りないかな」くらいで止めることが失敗しないポイント。前髪を切るだけなら、工作用のハサミで問題ありません。

［用意する物］
- ハサミ（あれば、すきバサミ）
- クシ（あれば、コーム）
- ピン（あれば、ダッカール）
- 鏡
- ドライヤー（なくてもOK）
- 髪の毛が服や床に残るのが気になるときは、ゴミ袋（ケープがわり）と新聞紙（床にしく）

①髪の分け目がなくなるように髪の毛を前に下ろす。

②左右どちらかの半分の髪の毛を、根元付近で挟む。

③横に指をスライドしていくと、以前切った前髪が落ちる。

④クシを使って前髪とそれ以外の髪の毛を分ける。

⑤分け目がくっきり見えるように丁寧に分ける。

⑥前髪以外の髪の毛をピンでとめる。

⑦反対側も同じように。

⑧前髪を引っ張ると山型の線が現れる。この形にすることが重要！

⑨薄めの前髪にしたいときは、山型の頂点の角度を緩やかに。

⑩すべての前髪を挟んで、引っ張る。額と髪の毛の角度は約45度。

⑪切りたい長さ（今回は目と眉毛の間の長さ）の2センチほど下まで、ハサミを横にしてカット。

⑫一旦おろして長さを確認。前髪の両サイドが長いと小顔効果がある。

⑬前髪を指で挟み、ハサミを縦にし、ハサミの先2センチを使用して切りたい長さまで少しずつ切る。

⑭できれば一度ドライヤーでブローし、仕上がりの髪の状態に近づける。

⑮再度⑬の切り方で長さを調整したら完成。矢印部分を少しだけ短く切ると髪を斜めに流せる。

知っトク情報

筋トレで健康に！②

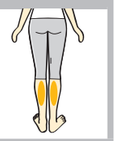
ナビゲーター＝山村昂平さん
（ジンバブエ・陸上競技・2016年度3次隊）
アスレチックトレーナー

脹脛（ふくらはぎ）ストレッチとカーフレイズ

健康維持のためには食事管理と運動が欠かせません。開発途上国の生活において、健康的でヘルシーな食事をすることは日本で生活する際よりも困難なことが多いはずです。そのため、消費エネルギーを増やすという観点でもストレッチや筋トレは有効であると考えています。

脹脛ストレッチ→カーフレイズ（15回×3セット）

この筋肉にきく！
脹脛（カーフ）のヒラメ筋と腓腹筋（ひふくきん）…血を全身に巡らせる役割があり、第二の心臓とも言われる脹脛。動かすことでむくみの解消にもつながります。
※痛みや違和感がでる場合には中止してください



0 まずは、ストレッチ。

［30秒交互に1セット。］

ポイント
❶左の膝を床につけて片膝立ちになる。
❷右手の膝に両手を乗せて体重をかけて脹脛を伸ばす。
❸前足に体重をかけ右足のかかとで地面を押すイメージで伸ばす。

1 手を開いて壁につける。

ポイント
❶肩の高さくらいに手を開き、壁につける。
❷目線は下げない。
❸立つ位置は、少し壁にもたれ掛かるくらいの距離。

［2秒で上げ、上で3秒キープ、2秒で下ろす、15回3セット。］

2 かかとを上げる。

ポイント
❶頭からつま先まで一直線になるイメージで。
❷足首、膝、太ももの内側に力を入れてかかとを上げる
❸太ももにクリアファイルなどを挟み、内腿を締める感覚を感じる。
❹かかとが上がりきったとき、親指に体重が乗っている。

生活に役立つ技

あるものでクッキング

ナビゲーター＝大西海斗さん
（ウズベキスタン・理学療法士・2015年度3次隊）

ジュースパックでつくるパウンドケーキ

専用の型がなくても大丈夫。皆さんよくご存知の「パウンドケーキ」を、少しでも楽に、簡単に♪　旬のフルーツでつくったジャムやソースをかけると、素朴なパウンドケーキが大変身。この型で、グラタンやドリアもつくれます。派遣国の名産品、ナッツやフルーツ、紅茶などを入れて楽しんでみてください！

［材料］
- 薄力粉…100g
- 砂糖…100g
- バター…100g（できれば無塩）
- ベーキングパウダー…小さじ1
- 卵…2個
- バニラビーンズ…1/3本（あれば）
- ジュースパック …1本（約1リットル）
- アルミ箔・クッキングシート…適量

①ジュースパックの1面を切り抜き、型をつくる。プラスチック部分があるときは切り取る。パックの内側にアルミ箔かクッキングシートを敷く。両方敷いてもOK。

【準備】❶薄力粉とベーキングパウダーは合わせてふるっておく。
❷バター、卵を室温に戻す。
❸オーブンを180℃に予熱する。

②ボウルにバター、砂糖を入れ、木じゃくしで柔らかくなるまで練り、泡立て器でクリーム状にする。溶いた卵を少しずつ混ぜ合わせ、バニラビーンズを入れる（あれば）。

③薄力粉・ベーキングパウダーを入れ、ボウルの底からすくい上げるように全体をさっくり混ぜ合わせる。

④型に生地を流し入れ、30センチくらいの高さから落として空気を抜く。天板にアルミ箔を敷き、型を置く。

⑤オーブンで約30分焼いたら、出来上がり。粗熱をとった後、ラップに包んでひと晩置くと、しっとりしておいしくなります。

投稿募集！

活動や生活に役立つちょっとしたテクニックをお持ちの方は、『クロスロード』編集室まで。
✉crossroads@sojocv.or.jp

防犯対策

―こんなとき、どうする!? ―

露店での昼食後に置き引き被害

昼食後、手洗いに席を立ったら、

友人とバス停付近の露店での昼食後、荷物を友人に見ておいてもらうよう依頼し、荷物を席に置いたまま手を洗いに席を立った。

置いていたバッグをとられた。

荷物は友人が見ていたが、横から何者かに声をかけられた隙に置いていたバックをとられた。一瞬の出来事であり、席に戻ったときには犯人の姿は見当たらなかった。

解説

貴重品は他人任せにせず、自分で責任をもって管理すること。特にバス停や露店などのように人が多く集まるところでは、たとえ短時間であっても貴重品から目を離さず、警戒を怠らないことが大切です。人から話しかけられた時も警戒し、常に貴重品を意識し目を離さないことが大切です。開発途上国では、日本人はお金や高価な物品を身に着けていると認識されています。犯罪の対象になるリスクが常にあることを意識し、注意を怠らないようにしましょう。

安全管理担当者からのワンポイント対策

貴重品袋などを活用し、身に着けられるものは常に携帯しておくことを心掛けましょう。

いつ? どこ?

隊員関連イベント情報

JICAやその関連団体が主催・共催・後援などをするJICA海外協力隊関連のイベントをご紹介します。

9月28、29日 グローバルフェスタ　東京

協力隊事務局や隊員関連のブースが出展

昨年の事務局のブースの様子

東京・江東区のお台場センタープロムナードで、日本最大級の国際協力イベント「グローバルフェスタJAPAN」が今年も開催されます。JICA青年海外協力隊事務局は、JICAfeを出展、テント内では個別相談のほか、大好評のトークイベント「協力隊の歩き方」を開催予定。

また、9月29日（日）14時30分から会場内スペシャルステージにて「青年海外協力隊×スポーツ」（仮）をテーマにトークイベントを実施予定。詳細は決まり次第JICA海外協力隊のウェブサイト（https://www.jica.go.jp/volunteer/）にアップしますので、ぜひチェックしてください。

いつ? 9月28日（土）、29日（日）10:00～17:00
どこ? お台場センタープロムナード（東京都江東区）
詳細 http://www.gfjapan2019.jp/

9月8日 青年海外協力隊×地域おこし協力隊パネルトーク　島根

海外と国内をフィールドにする2つの「協力隊」によるイベントを開催します。それぞれの協力隊がどんな思いで、どんな活動をしているのかに関心がある方、ぜひお越しください！

いつ? 9月8日（日）10:00～13:00
どこ? 古民家活用型多創造複合施設「SUETUGU」（島根県松江市）
詳細 「JICA中国」ウェブサイト内「イベント情報」をご覧ください。

9月15日 協力隊帰国報告会　静岡

SHIZUOKA×WORLD REPORT2019

協力隊の活動を終え1年以内に帰国した隊員（約21人）が、現地での生活や活動など、ナマの声をお届けします！　募集説明会や個別相談の機会を設け、応募や活動に関する疑問にもお答えします。

いつ? 9月15日（日）13:30～17:00（申込締切：9月13日〈金〉）
どこ? 静岡県庁別館20階（静岡県静岡市）
詳細 「JICA中部」ウェブサイト内「イベント情報」をご覧ください。

連絡先やURLの記載がないイベントの詳細は、開催場所の国内拠点のウェブサイトをご覧ください。https://www.jica.go.jp/about/structure/domestic/index.html

新青年海外協力隊事務局長着任のお知らせ

山本美香（やまもとみか）前青年海外協力隊事務局長に代わり、8月1日より小林広幸（こばやしひろゆき）が青年海外協力隊事務局長に就任しました。

【ごあいさつ】

小林広幸青年海外協力隊事務局長

1965年に始まったJICAボランティア事業は、皆様に支えられ、2017年には派遣総累計が5万人を超えました。その間、そして今もこの事業は特別の輝きを放ち続けていると思います。事業の3つの目的、①開発途上国の経済・社会の発展、復興への寄与、②異文化社会における相互理解の深化と共生、③ボランティア経験の社会還元、はこの事業の際立つ普遍性の源となっています。開発途上国への貢献を通して参加者自身も学び、成長し、再び社会に還元する考え方は、パートナーシップや「共創」の考え方そのものであり、国際協力の本質を捉え、体現し続けて来た事業と言えます。そして令和の時代では、共生社会実現が大きなテーマとなっており、この普遍的な価値が更にその輝きを増すことが期待されます。

5万人という数字の背景にある、一人一人の隊員が各国の人々と共に流した汗、悩みながらも喜びを分かち合った日々、そして培われた絆を思うと、圧倒的な実績の大きさと重さを実感します。本事業の更なる発展に向け尽力して参ります。ご支援のほど宜しくお願い申し上げます。

【プロフィール】

1992年、青年海外協力隊員（理数科教師･1992年1次隊）としてタンザニアへ派遣される。96年JICA入構。ルワンダ事務所長、産業開発・公共政策部次長、四国センター所長を経て、2019年8月1日より現職。

秋篠宮皇嗣同妃両殿下が青年海外協力隊帰国隊員とご接見

前列左から、興津絵美さん（トンガ・珠算・2016年度1次隊）、山本佳子さん（ガーナ・保健師・2016年度2次隊）、北岡伸一JICA理事長、椎名麻衣さん（キルギス・コミュニティ開発・2016年度2次隊）、大藤壮輔さん(ベトナム・獣医・衛生・2016年度2次隊)、後列左から、岩永憲門さん（ペルー・柔道・2016年度1次隊）、宮田祐介さん（東ティモール・福祉用具・2016年度1次隊）、鵜澤光佑さん（マダガスカル・コミュニティ開発・2016年度1次隊）、山本美香前青年海外協力隊事務局長

派遣国での約2年間にわたる活動を終え、帰国した青年海外協力隊員の代表7人が7月23日、赤坂御所で秋篠宮皇嗣同妃両殿下からご接見を賜りました。

ご接見では、それぞれの任地での課題や、関係者と協力し取り組んだ過程、そして、その成果について、両殿下にご報告させていただきました。また、帰国後の仕事や進学についてお話が広がり、2年間の協力隊活動が現在につながっていることもお伝えしました。両殿下は熱心に温かく耳を傾けてくださり、参加者は終始和やかな雰囲気の中でご報告を終えることができました。

ジュニア専門員の募集

ジュニア専門員制度とは、JICA事業実施においてニーズがありながらも人材が不足している分野の人材養成を目的とした制度です。青年海外協力隊など、開発途上国の活動経験を有し、将来にわたり国際協力業務に従事することを志望する若手人材を対象に、JICA本部で実地研修の機会を提供します。ジュニア専門員は研修ポストごとに随時募集しますので、ご関心ある方は国際キャリア総合情報サイト「PARTNER」をご確認ください。

▶JICAウェブサイト「ジュニア専門員とは」
https://www.jica.go.jp/recruit/jrsenmonin/
▶国際キャリア総合情報サイト「PARTNER」
http://partner.jica.go.jp/PartnerHome

2019年春募集の選考が終了

2019年春募集の二次選考が終了し、7月16日に合否が発表されました。それぞれの部門別の合格者数は以下の通りです。

【一般案件※1】（2019年8月9日現在）
青年海外協力隊（JV）※2／
日系社会青年海外協力隊（日系JV）※3〈部門別〉

部門名	要請数（件）		応募者数（人）※4	合格者数（人）	
	JV	日系JV		JV	日系JV
計画・行政	105	1	157	50	1
公共・公益事業	24	—	9	3	—
農林水産	73	1	38	28	—
鉱工業	48	1	20	10	—
エネルギー	2	—	0	—	—
商業・観光	25	—	16	9	—
人的資源	697	62	572	251	13
保健・医療	218	3	131	68	2
社会福祉	72	—	43	22	—
合　計	1264	68	986	441	16

※1 一般公開ではない大学連携、自治体連携案件を含みます。
※2 海外協力隊を含みます。
※3 日系社会海外協力隊を含みます。
※4 JVと日系JVは併願が可能なため延べ人数。

【シニア案件】（2019年8月19日現在）
シニア海外協力隊（SV）／
日系社会シニア海外協力隊（日系SV）〈部門別〉

部門名	要請数（件）		応募者数（人）※5	合格者数（人）	
	SV	日系SV		SV	日系SV
計画・行政	4	—	10	2	—
公共・公益事業	9	—	18	4	—
農林水産	13	—	10	3	—
鉱工業	5	—	5	2	—
エネルギー	4	—	5	0	—
商業・観光	20	—	37	9	—
人的資源	34	1	42	8	0
保健・医療	10	—	18	3	—
社会福祉	2	—	1	0	—
合　計	101	1	146	31	0

※5 SVと日系SVは併願が可能なため、延べ人数。

JICA海外協力隊の

つぶやき

お題 ▶ おまじない

イラスト＝牧野良幸

今月の1枚

明日も天気！

日本にいたとき、梅雨明け前は連日雨で、ほんと憂鬱（ゆううつ）だった。ここでは、連日晴れ。毎日天気が良くて、心も晴ればれ。そして、こちらの人に「日本では、『てるてる坊主』なるものをつくって、晴れを祈るんだよ、こんな形で軒先に吊るして祈るんだよ」と話したら、「ここでは、雨の心配ないからね。必要ないよ」と笑いとばされた。

ペンネーム：晴れが好き、雨は嫌いさん（男性）　SV（アフリカ・2018年度派遣）

★ハンドパワー

任地で体調を崩したとき、祈祷師（きとうし）のおじさんが来て、コップの水に祈りを捧げてくれました。その水を飲んだおかげか次の日には大分回復し、ご飯も食べられるように。もしかしたらハンドパワーはあるのかもしれないと思い始めた今日この頃です。ここだけの話、祈祷師のおじさんは自分が病気のときはちゃんと受診していました。

ペンネーム：おじさん、ありがとうさん（女性）
協力隊員（中南米・看護師・2017年度派遣）

★来世のために

仏教が盛んな派遣国では、野良犬にもご飯をあげることで来世のための「クドー（功徳）」になると考えられています。しかし、ご飯のあげすぎで、糖尿病気味の犬がいたり、ご飯が腐ってしまい、それを知らずに踏んで転んでしまったりする人もいるとか。あちらを立てればこちらが立たず、功徳とはどの尺度から見るべきか。

ペンネーム：マンゴーさん（男性）
協力隊員（アジア・青少年活動・2017年度派遣）

★★お賽銭箱（さいせんばこ）もアフリカ流

派遣国には神社があるということを聞いて現地の友だちと行ってきました！　ちゃんと神主さんがお清めをしてくれて、中に入ると説法のようなものをしてくれました（現地語で内容はわからなかったですが笑）。願い事をするために、なぜかコーヒー豆が入った葉っぱにお賽銭を入れるというなんとも不思議な体験でした！

ペンネーム：ぽんさん（女性）
協力隊員（アフリカ・コミュニティ開発・2018年度派遣）

募集中のお題
「原動力」「質問」「リフレッシュ」

投稿は『クロスロード』編集室まで
（P35をご覧ください）

あなたのつぶやきがイラストになるかも！？

就職・進学を始め各種情報の提供など帰国隊員の進路決定までをサポート

JICA進路相談カウンセラー／青年海外協力隊相談役の紹介

今月の相談（就活編）

よくある相談に進路相談カウンセラー／青年海外協力隊相談役がお答えします。

Q. 企業が持つ協力隊へのイメージと、アピール方法を教えてください。

A. 「バイタリティのある人間」と思っているようです。

すべてという訳ではありませんが、多くの企業は「生活環境も厳しいところへひとりで派遣され、その中で現地の人々のために活動を行ってきたバイタリティのある人間」と思っているようです。また、語学力では英語はもちろん現地語もできる人材と思っているところもあります。実際にある企業（国内事業が中心）で帰国隊員が採用された理由を社長に尋ねたところ、「企業内に新しい風を入れてくれそう」という答えが返ってきました。

例えば以下のような点を具体的な事例を用いてアピールするのはいかがでしょうか。

- ●現地の人とのコミュニケーションのとり方。
- ●現地のニーズの調査方法とその成果。
- ●現地の人をどのように巻き込んだのか。
- ●どのような壁をどのように乗り越えたのか。
- ●上記経験を応募先企業でどう発揮し、相手に利益をもたらすことができるのか。など

進路相談カウンセラー／青年海外協力隊相談役に、進路・就活の悩みなど、いつでもご相談ください。

●経歴：専門学校勤務を経て青年海外協力隊に参加（モロッコ・技術科教師・1996年度3次隊）。職業訓練校システムづくりに取り組む。帰国後は国際協力、人材業界等に従事。2009年に「キャリアデザイン工房」を立ち上げ、グローバル人材の育成を目指し、教育機関や民間企業・団体、大学等での研修や講演、コンサルティングを行っている。2011年より進路相談カウンセラーを経て現職。

津田昌二（つだしょうじ）さん（青年海外協力隊相談役）

担当地域：滋賀・京都・大阪・奈良・和歌山・兵庫

Tsuda-Shoji2@jica.go.jp

JICAボランティア事業の目的のひとつは社会還元。ただその方法は千差万別。派遣国との懸け橋になる、国際協力現場で活躍する、開発教育の一端を担うなど。一方で「帰国後すぐに職場復帰するので経験を生かすなんて考える暇もない」という現職参加者の声を聞くこともあります。しかし、ある自治体で働く帰国隊員は「国際」とは全く縁のない部署に配属されましたが、仕事上住民の話をじっくり聞く場面があり、そこでは経験が生きていると話していました。こんな風に実はいろんな場面で経験を生かすことはできるはず。帰国後、進路を決めるためだけに相談役を利用するのはもったいない。長い帰国後の人生。経験の社会還元方法も一緒に考えていくことができればと思っています。

前原美和（まえはらみわ）さん（青年海外協力隊相談役）

担当地域：滋賀・京都・大阪・奈良・和歌山・兵庫

Maehara-Miwa@jica.go.jp

ニカラグア隊員としての帰国直前、「2年間よくやってくれてありがとう。でも、私たちがしてほしかったことは本当はそれじゃなかったのよ」と配属先で打ち明けられた活動の幕切れ。衝撃のあまり大泣きしながら帰国しました。「10年日本でがんばったら、もう1度JICA海外協力隊に挑戦しよう」と心に決めての現場復帰でした。

どこにいても、どんな仕事・活動でも相手がいます。相手が望むことと自分がしたいことや思いを、うまくバランスよくコントロールできるといいですね。みなさんからも、いろいろなお話を聞かせてください。

●経歴：民間企業勤務を経て、兵庫県芦屋市の公立中学校教諭（英語科/特別支援教育）として29年間勤める。在職中に現職派遣制度を利用し、協力隊に参加（ニカラグア・青少年活動・1998年度3次隊、SV・マレーシア・養護・2011年度2次隊）。ニカラグア帰国後、兵庫県OV教員研究会、全国OV教員・教育研究会としての活動や、外国人児童生徒に係るスクールソーシャルワークに携わっている。2019年7月に着任。

クロスロード

令和元年9月号［第55巻第8号 通巻650号］
発行日　令和元年9月1日

編集・発行：
独立行政法人国際協力機構青年海外協力隊事務局
〒102-8012 東京都千代田区二番町5-25
二番町センタービル

『クロスロード』ウェブ版は以下のアドレスからアクセスできます。
https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/pamphlet/crossroad/index.html

ご意見・ご感想をお聞かせください。

アイデアも大募集！

今号をお読みになり、どのようにお感じになりましたか。ご感想・ご意見をお寄せください。また、今後取り上げてほしい企画や特集のテーマ、ご紹介いただけるアイデアがございましたら、下記のメールアドレスにお送りください。

以下のようなアイデア・投稿を募集中です

- ●派遣国での活動・生活での“失敗”談、お聞かせください。
- ●活動や日常でちょっと役立つ、そんな技をお伝えください。もしくはこんな技を紹介してほしいというご要望もお待ちしています。
- ●P34の下に記載されている「お題」で派遣国での活動・生活のことをつぶやいてみませんか。
- ●帰国後の就活・進路の悩みをお寄せください。

eメール
一般社団法人協力隊を育てる会『クロスロード』編集室
crossroads@sojocv.or.jp

※本誌に掲載されている記事等の内容は執筆者の個人的見解であり、JICA の公式見解を示すものではありません。

2019年9月1日発行（毎月1回1日発行）第55巻第8号 通巻650号 編集・発行 独立行政法人 国際協力機構 青年海外協力隊事務局 〒102-8012 東京都千代田区二番町5-25 二番町センタービル

CROSS YELL!!
―先輩隊員からの置き土産―

実は私

教育方法への違和感から同僚たちと距離を置いていました。

文=春日井里菜（かすがいりな）さん
▶モンゴル
▶幼児教育
▶2017年度2次隊

PROFILE

1994年生まれ、岐阜県出身。同県内のこども園勤務を経て、2017年10月、協力隊員としてモンゴルに赴任。19年10月に帰国予定。

活動概要

オルホン県第9幼稚園（オルホン県エルデネト市）に配属され、主に以下の活動に従事。

- ●身近な物で簡単につくれる幼児用教材の普及
- ●園児の発達に合わせた指導プログラム策定の助言
- ●音楽や図画工作を取り入れた授業の実施

私は幼稚園に配属され、毎朝の体操指導、季節やテーマに合わせた制作活動の助言、日本の幼稚園の指導法や環境設備の紹介などに取り組んできました。

同僚たちと一緒に過ごす昼のお茶会は、今では大好きな時間ですが、最初からそう感じることができたわけではありませんでした。子どもたちを怒鳴りつけ、木の棒で叩く……。活動を始めた当初、彼女たちの教育方法を目の当たりにし、言葉を失ったのでした。

着任して半年ほど経ったころには、私が授業に入ると同僚が教室から出て行ってしまうなど、「うまくいかない」と思うことが増えていきました。自分の力不足を感じ、「そもそもこの幼稚園にとって私は必要なのだろうか」と、随分悩みました。

そうした状況から抜け出すため、私は「笑顔で挨拶」「とにかく参加してみる」「気持ちよく一日を終える」の3つを心がけることにしました。朝、笑顔で挨拶を交わすことで、一日の良いスタートが切れる。また、園の行事など何にでも積極的に参加することで、活動のアイデアがどんどん浮かんでくる。さらに、降園時に子どもや保護者と挨拶する時間をつくることで、うまくいかないことがあった日でも良い一日に変わるのでした。

この時期、配属先外でも笑顔になれる時間を増やそうと、ボクシングジムに入会。週3回、そこで出会った友人たちとの運動や会話を楽しむようにもなりました。

そんな日々を繰り返すうちに、いつしか周囲の見え方が変わっていき、同僚たちの「良いところ」がたくさん見えるようになりました。そうして活動に前向きに取り組めるようになると、彼女たちから「教えてほしい」「教わったことをやってみた」といったうれしい言葉をかけられることも増えていったのでした。

悩み、もがいたけれども、その分、人の温かみを感じることができた2年間。「また会いたい」と思える家族のような存在がたくさんできたことがうれしいです。

＼YELL!!／「悩み」という「種」から「花」が咲く！

協力隊員は悩み、もがくこともあると思います。しかし、「悩み」という「種」からは、いつか「花」が咲くはず。そう信じて、目の前のことに一生懸命に取り組み、ぜひ充実した日々を送ってください。

元気いっぱいの配属先の子どもたち。春日井さんが落ち込んだとき、いつも励ましてくれるのは子どもたちの笑顔だった

今月号の表紙
エチオピア

文=木ノ下望（きのしたのぞみ）さん
（エチオピア・服飾・2016年度3次隊）

私は首都アディスアベバにある職業訓練センターの服飾部門で、縫製の指導を行いました。写真は授業のひとコマで、「かがり縫い」など特殊な縫いができる「ロックミシン」の糸かけのやり方を指導しているところです。この糸かけは、縫製の仕事に就いた際に給料の上乗せにつながる大切なスキルでもあります。生徒たちはセンターで2週間から1カ月のトレーニングを受けたのち、縫製工場に就職したり、自分で事業を始めたりと、それぞれの道に進んでいきます。